

現在分詞とジェロンディフ — その類似点と相違点をめぐって —

1. はじめに

(1) 現在分詞 (-ant) とジェロンディフ (en+ant) は、形態的には前置詞 **en** の有無だけが異なり、しばしば交換可能だとされることがある。次の 2 つの例文を見てみよう。

a. *Il est rentré en chantant.* 彼は歌を歌いながら帰って来た。

b. *Il est rentré, chantant.* 彼は歌を歌って帰って来た。

a. の *en chantant* はジェロンディフで、b. の *chantant* は現在分詞である。伝統文法で b. は主語と同格の分詞節 (*proposition participe*) と呼ばれることが多い。ジェロンディフが口語的で分詞節が文語的というちがいがあがるが、ほとんど意味が同じとされている。たとえば朝倉 (2002) は次のように書いている。

「共に同時性・条件・譲歩などの意をあらわす点で酷似し、同一文でそのいずれをも用い得る場合が少なくない：*Des gamins courent en criant : Des gamins courent, criant.* この場合、ジェロンディフの副詞的性質と現分の形容詞的性質から、両者の相違を *Elle passa rapidement. Elle passa, rapide.* の相違に比することができる」

(朝倉季雄『新フランス文法事典』白水社、2002、p. 240)

つまりジェロンディフ *en criant* は副詞の *rapidement* と同じく、主節動詞の動作の様態 (*manière*) を表す副詞句 (状況補語) として働き、主節から遊離された現在分詞の *criant* は *rapide* と同じく間接属詞と見なすことができるということである。

しかし朝倉 (2002) の “*participe présent*” の項目には次のように書かれている。

「主語の同格として用いられた現分は副詞節で書き換え得る様々な意味を帯びる。

時：*Etant sorti du bois, il aperçut un loup.*

森から出ると 1 匹の狼を見かけた。

条件：*Feignant la bonne humeur, je vous agace.*

上機嫌を装えばあなたをいらいらさせる。」 (以下省略) (Ibid. p. 366)

Des gamins courent, criant. の現在分詞は間接属詞と同じ働きをすればいいと言いつつ、上記の例では副詞節で書き換え得るとするのは矛盾していないだろうか。

(2) 分詞節とジェロンディフは交換可能なことが多いとされることがあるが、いつもそうだとは限らない。Gettrup (1977) は次の例を挙げている。

a. *Bébé, elle fut un ange de douceur et de gaieté. Dormant dans notre chambre, jamais elle ne cria la nuit, ne réclama son biberon avant 7 heures du matin, et en dormant, encore elle riait.*

赤ちゃんの頃、この子は優しく機嫌のよい天使でした。私たち夫婦と同じ寝室で寝ていたのですが、夜中に泣き叫ぶことも、朝の 7 時より前にミルクをねだることも決してありませんでした。そして眠っている時も、この子は笑っていました。

Gettrup (1977) によれば、上の例の *dormant* と *en dormant* は入れ替えることができないという。また次の例では分詞節は適格だが、ジェロンディフは許容されない。

- b. {*Quittant* / **En quittant*} la place du marché avec son paquet de toile sous le bras, il alla faire des achats dans des boutiques de la rue principale.

麻布の包みを小脇に抱えて市場のある広場を離れると、彼は大通りの店に買い物をしに行った。

(3) 現在分詞とジェロンディフのちがいとしてよく挙げられるのは次の諸点である。

- ① 分詞節は主節の主語だけでなく、直接目的補語も意味上の主語とすることができる（または同格関係に立つ）。

- a. *Le voleur s'est enfui, courant très vite.* [主語]

泥棒は脱兎のごとく走って逃げた。

- b. *Je l'ai vu traversant la rue au feu rouge.* [直接目的補語]

私は彼が赤信号で通りを渡るのを見た。

一方、ジェロンディフの意味上の主語は常に主節の主語である。

- c. *Elle a vu Paul en se promenant dans le parc.*

彼女は公園を散歩しているときポールを見かけた。

→ 散歩しているのは彼女でポールではない。

N.B. *L'appétit vient en mangeant.* 「食べているうちに食欲が湧いてくるものだ」のように、ジェロンディフの意味上の主語が主節の主語とは異なることもある（この例では人一般）。主語不一致ジェロンディフと呼ばれるこのような例は、昔のフランス語の名残とされることもあるが、実際には現代語でも用例はある。

- ② 分詞節には複合形（完了形）があり、主節の出来事より前に完了した出来事を表す。

- a. *Ayant fait sa valise, elle appela un taxi.*

荷造りを済ませると彼女はタクシーを呼んだ

- b. *Etant sorti du bois, il aperçut un loup.*

森から出ると彼は1匹の狼を見かけた。

ジェロンディフには複合形はないとされる（実際には稀に用例がある）。

- c. *En ayant terminé pour six heures, vous aurez une heure de repos.*

6時間で止めたら1時間休憩時間があることになる。

(M. Greveisse et A. Goosse, *Le Bon usage* 12e édition, Duculot, 1986)

- d. *Ces personnes, tout en ayant travaillé plus de 40 ans, ne touchent qu'une pension dérisoire.*

この人たちは40年以上働いたのに、お涙金ほどの年金しか受け取れない。

(六鹿豊『これならわかるフランス語文法』NHK出版、2016)

- ③ 「手段」（～することによって）という意味を表すのはジェロンディフだけであり、分詞節にはこの意味はない。

- e. *En enseignant l'anglais, il gagne sa vie.* (春木 1992)

彼は英語を教えて生計を立てている。

f. **Enseignant l'anglais, il gagne sa vie.* (Ibid.)

N.B. 春木は分詞節を長くして情報量を増やすと手段の意味を表すとする。

Voyageant par terre et par mer dans le monde entier on s'instruit.

陸を歩き海を歩き世界中を旅することで人は見聞を広めることができる。

④ 「結果」を表すのは分詞節に限られる。(渡邊 2017)

g. *L'appareil, qui faisait la liaison Rio-Paris, s'était abîmé en pleine nuit dans l'Atlantique le 1^{er} juin 2009, causant la mort des 228 passagers.*

リオデジャネイロ・パリ間をむすんでいたその飛行機は、2009年6月1日の夜中に、大西洋に沈み、228人の乗客が死亡したのだった。

h. ... **en causant la mort des 228 passagers.*

⑤ 主節の表す出来事を敷衍する用法は分詞節に限られる。(春木 1992)

i. *Les enfants jouaient dans la cour, lançant la balle, sautant à la corde.*

子供たちはボール投げをしたり縄跳びをしたりして校庭で遊んでいた。

j. ?*En lançant la balle et en sautant à la corde, les enfants jouaient dans la cour,*

⑥ 原因・理由を表すにはジェロンディフよりも分詞節の方が適している。とくに *avoir, être, pouvoir* のジェロンディフは不可である。

k. *Etant très occupé, je ne suis pas venu.*

ひじょうに多忙だったので私は来なかった。

(目黒士門『現代フランス広文典』白水社、2015)

(4) 課 題

文法書では、分詞節とジェロンディフはよく似た意味を表し、入れ替えることができることもあるが、次の点が異なるとして相違点が列挙されていることが多い。しかしなぜ似ている点と異なる点があるのかを体系的に説明しているものは皆無と言ってよい。また特定の動詞が使えないといった制約の理由を説明しているものはない。

2. 予備的考察

(1) 分詞 (participe) とは何か

a. *participe (mode)* [分詞法] — 形容詞的形態のもとに動作を表す無人称法。動詞と形容詞の性質を共有する (*participer*) ところからかく名づけられた。

(朝倉季雄『新フランス文法事典』白水社、2002、p. 361)

b. ... *ce qui explique que le participe puisse, comme l'infinitif, et même plus encore que l'infinitif, flotter entre la catégorie du verbe et celles de l'adjectif et du nom : il participe, il ressortit des deux catégories, ce qui lui vaut son nom.*

(Le Bidois, G. & R. Le Bidois, *Syntaxe du français moderne*, Editions A. et J. Picard et Cie., 1968, p. 472)

このことから、分詞が不定詞のように、そして不定詞以上に、動詞と形容詞・名詞のカテゴリーの間を揺れ動くことが説明できる。分詞は「分有する」、つまりふたつのカテゴリーの性質を分かち持つ。そこから「分詞」という名が生まれた。

cf. participer 3. (文) [~de] [...の] 性質を帯びている、特徴を持つ。¶ *Le*

génie participe de la folie. 天才はどこか狂気じみたものだ。 4. ((哲)) 分有
(共有) する。 (『ロワイヤル仏和中辞典』)

(2) 分詞とは動詞の形容詞形である。

不定詞は動詞の名詞形である。

a. *Voir, c'est croire.* 見ることは信じること。(百聞は一見に如かず)

英語には動名詞 (gerund) という動詞の名詞形がある。しかしフランス語には動名詞のような特別な形態がなく、不定形をそのまま名詞として用いる。

b. *Seeing is believing.* 見ることは信じること。(百聞は一見に如かず)

一方、分詞とは動詞の形容詞形である。したがって、分詞のさまざまな用法の中で、付加形容詞用法が最も基本的な用法であると考えられる。

c. *Elle habite un appartement donnant sur un jardin public.*

彼女は公園に面したアパートマンに住んでいる。

N.B. 名詞を直接に修飾する動詞の形態なので、日本語の動詞の連体形と同じものと考えればよい。

「行く」: 未然 行か(ない) 連用 行き(ます) 終止 行く 連体 行く(とき)

假定 行け(ば) 命令 行け

動詞が形容詞化されたものなので、動詞としての性質を一部失っている。失ったものは ① 人称活用 ② 時制 ③ 法 である。分詞には活用がなく、独自の時制も法もない。しかし分詞は動詞の性質をすべて失ったわけではない。いまだに残っている動詞としての性質には次のものがある。

① 動詞のように目的補語・状況補語を取る。

d. *Il y a pas mal d'élèves apprenant l'espagnol.* [直接目的補語]

スペイン語を学ぶ生徒がかなりいる。

e. *On aime les enfants obéissant à leurs parents.* [間接目的補語]

両親の言うことをよく聞く子供が好かれる。

f. *Il a regardé les gens se promenant dans le parc.* [状況補語]

彼は公園を散歩する人々を見た。

② 助動詞を用いた完了形がある。

g. *Ayant prononcé ces paroles, il s'éloigna.*

そう言うと彼は遠ざかって行った。

③ 形容詞のような性数一致がない。

h. *Ce sont des projets de loi intéressant les petits commerçants.*

これは小売業者に関わる法案だ。

cf. 形容詞になると性数一致あり: *des films intéressants*

(3) 現在分詞と過去分詞

現在分詞は動詞の能動的な形容詞形である。

a. *Nous avons vu le paquebot partant de Nantes.* (= *qui partait de Nantes*)

私たちはナントを出航する客船を見た。

他動詞の過去分詞は、動詞の受動的な形容詞形である。このため動作主補語 (*par* ~)

を付けることができる。

b. Il y avait une église *détruite* (par les normands).

(ノルマン人によって) 破壊された教会があった。

一方、自動詞と代名動詞の過去分詞は能動的な形容詞形である。

c. Elle a ramassé les feuilles *tombées* à terre. (= qui sont tombées à terre)

彼女は地面に落ちた木の葉をかき集めた。

d. Il ne faut pas réveiller les enfants *endormis*. (= qui se sont endormis)

寝ている子供たちを起こしてはいけない。

(4) 多くの文法書では、現在分詞には次のような用法があるとされている。

① 付加形容詞として名詞を直接修飾する。

a. Elle rangeait les objets *ayant appartenu* à son père.

彼女は父親の持ち物だった品々を整理していた。

② 直接目的補語の属詞（二次述語）となる。

b. Je la vois *cousant* auprès de sa fenêtre. (朝倉 2002)

彼女が窓際で縫い物をしているのが見える。

主節が知覚動詞のときは、不定形と関係節も用いることができる。

c. Je la vois *coudre* auprès de sa fenêtre.

d. Je la vois qui *coud* auprès de sa fenêtre.

朝倉 (2002) は、不定形は単に動作を述べ、関係節は動作主 la に注意を向けるが、現在分詞は動作の継続の様を表して描写的であるとする。ただし、想像上のことについては現在分詞しか用いないと述べている。

e. Je le vois encore *buvant* son café dans cette tasse.

彼がこの茶碗でいつもコーヒーを飲んでいた姿が今でも目に浮かびます。

現在分詞は知覚動詞以外の動詞にも用いることがある。

f. Je l'y ai trouvé *causant* avec eux.

彼がそこで彼らと話しているのを見つけた。

【補 足】

現在分詞を直接目的補語の属詞として用いることができるのは、SVOC 構文を取る動詞に限られるように思えるが、実際にはそうではないようだ。

g. Leur fille avait été remarquée *sortant* d'un hôtel. (朝倉 2002)

娘がホテルから出てくるところを人に見られた。

h. Je l'ai rencontré *causant* avec une vieille femme à coiffe blanche, une paysanne.

(Emile Pouillon, *Petites âmes*)

私は彼が白い被り物を被った老婆と話しているところに出会いました。農婦ですよ。

remarquer も rencontrer も SVOC 構文を取る動詞とは見なされていない。どのような動詞が直接目的補語の属詞として現在分詞を取ることができるのかは、まったく不明である。上の例で remarquer は知覚動詞の一種とみなすことができる。それ以外には、trouver 「見つける」、croiser 「すれ違う」、rencontrer 「出くわす」のように、発見・接触を表す動詞が可能なようだが、詳細は今後の課題である。

③ 主語の同格節（分詞節）

i. *Il est reparti vieilli, faisant mal à voir.*（朝倉 2002）

老いぼれて見るも哀れな姿で帰っていきました。

このとき同格節は副詞節（従属節）と同じ働きをして、次のような意味を帯びるとされている。

(A) 時：同時性

j. *Il se promenait, rêvant à son projet.*（朝倉 2002）

計画のことを考えながら、散歩していた。

時：先行性（複合形）

k. *Etant sorti du bois, il aperçut un loup.*（朝倉 2002）

森から出ると狼を見かけた。

(B) 条件

l. *Feignant la bonne humeur, je vous agace.*（朝倉 2002）

上機嫌を装えばあなたをいらいらさせる。

(C) 対立

m. *Il veut, ignorant tout, parler de tout.*（朝倉 2002）

何も知らないのに何でも話したがる。

(D) 譲歩

n. *Je ne le savais pas. Mais, le sachant, j'aurais agi de même.*（朝倉 2002）

それは知らなかったわ。でも、知っていたにしても、同じことをしたでしょうね。

(E) 原因

o. *Ils s'assirent, étant fort las.*（朝倉 2002）

彼らは非常に疲れていたので、腰をおろした。

目黒 (2015) はこれらに加えて、分詞節が単なる付帯状況を表すこともあるとする。

p. *Elle mangea tristement à la lueur d'une bougie, songeant à mille choses.*

彼女はいろいろなことを考えながら、ろうそくの明かりのもとで寂しく食事をした。

(5) 一方、ジェロンディフは副詞節に相当し、次のような意味を表すとされている。

(A) 同時性

2つの継続行為

a. *Elle disposait de fleurs sur la table, en chantonnant.*（朝倉 2002）

小声で歌を口ずさみながら、机の上に花を生けていた。

主節は瞬間的行為、ジェロンディフは継続的行為。

b. *Elle répondit d'une voix calme en essuyant ses yeux humides.*（朝倉 2002）

涙に潤んだ目をぬぐいながら、静かな声で答えた。

継起的行為（ジェロンディフは完了動詞）

c. *En revenant du Portugal, j'irai m'installer à l'hôtel.*（朝倉 2002）

ポルトガルから帰ったら、ホテルに行って落ち着こう。

(B) 原因

d. Il se tut (...) *en voyant* que sa femme pleurait. (朝倉 2002)

妻が泣いているのを見て、彼は黙ってしまった。

(C) 手段

e. On punit la vanité *en ne la regardant pas*. (朝倉 2002)

他人の虚栄はこれを無視することによって罰することができる。

(D) 様態

f. Il parle *en bégayant*. (朝倉 2002)

彼は口ごもりながら話す。

(E) 条件

g. Tu ferais plaisir à Henriette *en allant* la voir. (朝倉 2002)

会いに行つてやれば、アンリエットも喜ぶわ。

(F) 対立

h. Le don, ça n'est presque rien, — tout *en étant* indispensable. (朝倉 2002)

才能などほとんど取るに足らんよ、それは不可欠ではあるが。

(G) 譲歩

i. *En admettant* que nous réussissions, ce serait inutile. (朝倉 2002)

うまくいくにしても無駄だよ。

(東郷訳：仮に私たちが首尾よく事を運ぶと考えても、それは詮無いことだ)

3. 先行研究の概観と批判的検討

3.1. Le Bidois et Le Bidois (1968)

代表的な伝統文法の文法書だが、参考になる記述が少なくない。

(1) ジェロンディフには「原因」の意味があるが、本来「原因」を表すのは現在分詞の役割である。

Entre *moyen, manière*, et même simple *simultanéité* d'une part, et de l'autre, *causalité*, les rapports sont si naturels, l'esprit glisse si aisément d'un de ces premiers points de vue au dernier, que le gérondif peut très bien faire penser à la cause, à l'instar du participe. (...) C'est au participe, on le verra, qu'est réservé le privilège de la [=l'idée de cause] manifester.

(Le Bidois et Le Bidois 1968 Tome I : 476)

「手段」「様態」あるいは単なる「同時性」と「原因」の関係はとても自然なもので、前者から後者へはたやすく移行する。ジェロンディフは現在分詞のように「原因」を表すのである。(…)後で見るようにもつぱら「原因」を表す働きは現在分詞にある。

(2) ジェロンディフが表すのは同時性で、現在分詞は「原因」を表す。

Encore une fois, ce qui est mis par le gérondif au premier plan d'éclairage, c'est le fait d'une coïncidence pure et simple. Au contraire, la forme en fonction de participe ne marque nullement de soi un simple rapport de simultanéité. Quand elle ne se borne pas à énoncer simplement un fait, une habitude, une qualité ; quand elle énonce vraiment, comme c'est son rôle propre et sa raison d'être, une action c'est dans un jour, sous un rapport, non pas chronologique, mais logique.

(Le Bidois et Le Bidois 1968 Tome I : 481)

もう一度言うが、ジェロンディフが前面に押し出す意味は純粋な同時性である。逆に現在分詞はそれ自身としては単純な同時性を表さない。現在分詞がたんなる事実・習慣・性質を述べることに甘んじることなく、それが役割であり存在理由であるように、ひとつの行為をほんとうに述べる時、その行為は出来事の時間的關係の下ではなく、論理的關係の下において述べられるのである。

→ ここで著者は、ジェロンディフの本来の意味は「同時性」であり、現在分詞は単なる「同時性」ではなく「原因」の意味を表すとしている。著者は現在分詞の次の例を引いて解説している。

Voyant qu'on ne l'écoutait pas, il cessa de parler.

誰も聞いていないのに気づいて、彼は話を止めた。

この分詞節を *quand / lorsque* の時の従属節に書き換えるのは誤りで、*parce que* で書き換えなくてはならないと説く。

(3) 「原因」の意味を最もよく表すことができるのは現在分詞である。

Mais, pour des raisons que l'on verra au tome II, de tous les procédés syntaxiques propres à rendre le rapport de causalité, aucun n'est plus commode, plus expressif, plus conforme aussi au génie de notre langue, que l'emploi du participe présent.

(Le Bidois et Le Bidois 1968 Tome I : 481)

しかしながら、第2巻で述べる理由によって、「原因」の意味を表すことのできる統語的手段のうちで、現在分詞ほど便利で、表現力が豊かで、またフランス語の本性に合致しているものはない。

(4) 「原因」を表すには分詞節に優るものはない。

On sent combien ces constructions l'emportent en relief et en concision sur des tours analogues avec ligature causale explicite. Un dernier exemple va achever de mettre au jour l'éclatante supériorité de tour participial : « Déçus par leur liberté, ils en ont à la fin détesté l'excès, honteux d'avoir eu tant de pouvoir, et leurs propres succès leur faisant horreur. » Boss, Or. Reine d'Angl. Dans cette phrase si substantielle, si ramassée, l'idée de causalité jaillit à chaque pas, comme d'autant de sources distinctes.

(Le Bidois et Le Bidois 1968 Tome II : 446)

この構文 [=分詞節] が、明確な接続詞を持つ類似表現に較べて、意味の奥行きと簡潔さにおいてどれほど優っているかを感じることができよう。分詞節の圧倒的な優位性を示す例をもうひとつ付け加えておこう。「自分たちの自由に失望して、彼らはとうとう自由の行き過ぎを嫌悪するに至った。かくも強大な権力を持ったことに恥じ入り、成功に畏れを抱くようになったのである」この含蓄に富み簡潔な文において、原因の意味がそれぞれの場所において、ひとつひとつ異なるものとして表されている。

(5) 現在分詞には分詞節と主節とを緊密に結合する力がある。

Qu'à la phrase : « Le garçon, croyant qu'on l'appelait, accourut », on substitue celle-ci : « le garçon, qui crut, etc. » qu'en résultera-t-il ? D'abord, la relation de cause ne sera pas mieux rendue ; à y regarder de près, elle le sera même moins bien : la causalité, mise en si bonne lumière dans la première phrase où sa notation par le participe est exactement au même plan

d'éclairage que celle du verbe principal, semble, dans l'autre, reculer au second plan. De plus, la première construction doit au ciment du participe présent une solidarité remarquable, tandis que la seconde, avec sa proposition conjonctive, semble relâcher quelque peu le lien du rapport. (...) Tant il est vrai que le participe a de soi une extrême force unissante.

(Le Bidois et Le Bidois 1968 Tome I: 482)

「少年は呼ばれていると思ったので [分詞節] 駆けつけた」という文を、「少年は…とあって [非制限的關係節] …」に変えると何が起きるだろうか。まず原因という関係がよりうまく表せるわけではない。よく見てみると非制限的關係節の方が劣っている。原因は分詞節でははっきりと表現されており、分詞が表す内容と主節動詞が表す内容は同一レベルにある。ところが非制限的關係節では原因は背景に退いてしまう。おまけに分詞節では現在分詞の持つ結合力的によって、主節と分詞節とは緊密に結合している。一方、非制限的關係節では従属節であるために、原因と結果の関係が少なからず緩いものになっている。(…) 実際、分詞そのものに極めて強力な結合力が備わっているのである。

→ 著者たちは、分詞節が「原因」と「結果」の関係を簡潔かつ緊密に表現することができるのは、現在分詞の持つ「結合力」によることを強調している。この「結合力」とは何だろうか。

a. *Voyant qu'on ne l'écoutait pas, il cessa de parler.*

誰も聞いていないのに気づいて、彼は話を止めた。

b. *Parce qu'il vit qu'on ne l'écoutait pas, il cessa de parler.*

誰も聞いていないのに気づいたので、彼は話を止めた。

b. は [従属節] — [主節] という構造で、*il cessa de parler* が主要な内容である。(parce qu') *il vit qu'on ne l'écoutait pas* は理由を述べる従属節なので、その内容は副次的なものとなっていて、背景化される。つまり「彼は話を止めた。(ちなみにその理由は) 誰も聞いていないのに気づいたからである」となる。

これにたいして a. の分詞節は主節の主語と同格関係にあるので、主節と分詞節は等しい意味上のウェイトを持つ。「誰も聞いていないことに気づいた」と「彼は話を止めた」は対等の重さで一連の出来事を表している。このように分詞節と主節が一体となってひとつの出来事を表すというのが、Le Bidois らの言う「結合力」であると考えられる。このことは分詞節の機能を考察する上で重要な鍵となる。cf. Herslund (2000)

(6) 分詞節の意味的なウェイトは主節と同等である。

(...) cette forme [=participe présent], rapprochée de celle en fonction du gérondif, en diffère profondément : en ceci, avant tout qu'elle énonce une action (ou un état) non pas seulement simultanée, non pas simplement un peu secondaire par rapport à l'action du verbe principal, mais présentée comme aussi importante que celle de ce verbe.

(Le Bidois et Le Bidois 1968 Tome I: 486)

この形式 (=現在分詞) はジェロンディフと似てはいるものの、ジェロンディフとは根本的に異なっている。何より現在分詞は、動作 (あるいは状態) を単に同時的なものや、主節の動詞が表す動作に較べてやや副次的なものとして表すのではなく、主節の表す動作と同じく重要なものとして表現するのである。

3.2. Gettrup (1977)

現在分詞とジェロンディフの比較についての最重要文献である。しかし理論的に整理されていない部分があり、また *quand* 節との比較もしているために、必ずしもわかりやすい論文ではない。著者は主に次の点を究明しようとしている。

- ① 主節に対して前置されたときに、両形式が時の定位点 (*repère temporel*) になれるかどうか。→ ジェロンディフはなれるが、分詞節はなれない。
- ② ジェロンディフが主節に対して前置されたときと後置されたとき、どのように働きがちがうか。→ 時の定位点となれるか、情報価値の比重、etc.
- ③ ジェロンディフは前置されたとき従属節と同等の働きをするが、分詞節は主節と同等の振る舞いをする。
- ④ ジェロンディフと分詞節を *quand* 節に書き換えることができるのはどのような場合か。

このような点を論じているために、Gettrup は「時」を表す分詞節とジェロンディフしか考察の対象としておらず、他の意味を表す場合は扱っていない。

(1) 時の定位点 (*repère temporel*) とは何か

Gettrup は明確な定義を示していないが、次の例のように主節の出来事がいつ起きたのかを表す節と考えてよい。a.はb.のように *quand* 節に書き換えることができる。

a. *En arrivant à la maison neuve d'Urbain, Voiturier aperçut les Muselier*

(Aymé, *La vouivre*)

ユルバンの新築の家に着いたとき、ヴォワチュリエはミュズリエ一家を見かけた。

b. *Quand il arriva à la maison neuve d'Urbain, Voiturier aperçut les Muselier.*

これにたいして次の例は時の定位点と見なすことはできない。

c. *L'adolescente à bicyclette disparaissait sur la route déjà sombre en faisant sonner son grelot. (Mauriac, Thérèse)*

自転車の少女は鈴の音を響かせながら、すでに暗くなり始めた道を遠ざかって行った。

→ このジェロンディフは「様態」(*manière*) を表す。**quand elle a fait sonner...*と書き換えることはできない。

また次の分詞節の例も時の定位点と見なすことはできない。分詞節が表す出来事は主節よりも前に起きているからである。

d. *Prenant Urbain à bout de bras, il le déposa doucement sur le sol. (Aymé, La vouivre)*

ユルバンを腕の先で持ち上げると、彼はゆっくりと地面に降ろした。

→ **Quand il prit / avait pris Urbain...*と書き換えることはできない。

(2) ジェロンディフにはたとえ部分的であっても同時性が必要だが、現在分詞はその限りではない。現在分詞は主節より前に起きた事行を表すことができる。

Selon ma théorie, le participe présent n'est pas un repère temporel. Il n'indique donc ni la simultanéité, ni aucune autre relation de temps (...). Je rappelle que, par là, je ne nie pas l'existence de relations temporelles entre le verbe participial et le verbe fini. (...) Il faut

distinguer deux cas. Un exemple du premier est fourni par (8) [=上の(1 d)]. Là il n'y a pas de simultanéité, même partielle. Dans le second cas, il y a simultanéité partielle, et le participe présent et le gérondif peuvent être employés concurremment.

(31) *en traversant* la place Saint-Sulpice, il s'est heurté contre un banc et il est tombé.

(Butor, *Degrés*)

(32) Mais il avait des ennemis sur toutes les routes possibles de retour. *Traversant* l'Autriche, il fut fait prisonnier par le duc Léopold. (Larousse, Richard Cœur de Lion)

(Gettrup 1977 : 227)

私の理論では、現在分詞は時の定位点ではない。したがって、現在分詞は同時性を表さず、その他のいかなる時間的な関係も表さない。(…) もう一度言うが、私は現在分詞と主節の動詞の間に時間的な関係がないと言っているわけではない。(…) 二つのケースを区別しなくてはならない。一つは(8) [= (1 d.)]のようなケースである。そこには同時性はなく、部分的な同時性 (= 二つの出来事の重なり) すらない。二つ目のケースは部分的な同時性がある場合である。このときは現在分詞とジェロンディフの両方を用いることができる。

(31) サン=シュルピス広場を横切っている時に、彼はベンチにつまずいて転んだ。

(32) 帰還する道のいたる所に敵がいた。オーストリアを横断している時に、彼はレオポルド公に捕まった。

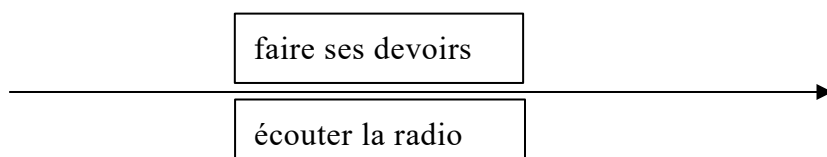
【解説】

Gettrup は分詞節とジェロンディフとでは、主節の表す出来事との時間的關係が異なるとする。ジェロンディフを使うことができたためには、二つの出来事の間になくとも部分的な同時性 (=出来事の重なり) が必要だとする。

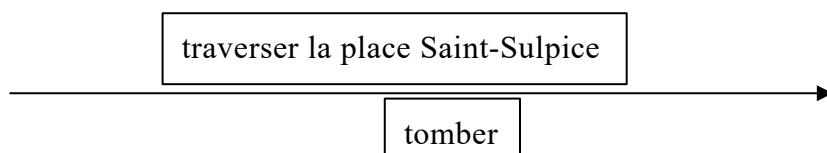
i) Il a fait ses devoirs *en écoutant* la radio. [作例]

彼はラジオを聞きながら宿題をした。

典型的な同時性を表すこの例では、「宿題をする」時間と「ラジオを聞く」時間とは完全に重なる。したがってジェロンディフを用いる条件が満たされている。(Il a fait ses devoirs, *écoutant* la radio.のように分詞節も可能)



一方、例(31)ではサン=シュルピス広場を横切っている間にベンチにつまずいたので、時間的關係は後者が前者に包含される形になる。

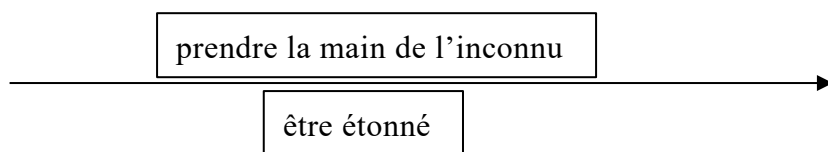


このように部分的な同時性があるために、ジェロンディフを用いることができるとしているのである。次の例も同様である。

(30) *En prenant* la main de l'inconnu, elle fut étonnée de la sentir chaude comme celle d'un

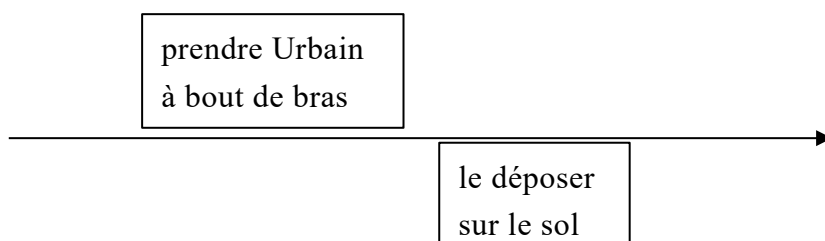
fiévreux. (Troizat, *Geste*)

その見知らぬ男の手を取った時、彼女はその手がまるで熱を出した病人の手のように熱いことに驚いた。



一方、(1 d.) の時間的關係は次のようになる。

(1) d. *Prenant Urbain à bout de bras, il le déposa doucement sur le sol.*



二つの出来事は次々と起きていて、時間的な重なりがない。このとき分詞節はジェロンディフに書き換えることができないというのである。

Gettrup の主張は次のように定式化することができる。

ジェロンディフが表す出来事と主節が表す出来事の間になくとも部分的な同時性（重なり）があるときに限り、ジェロンディフを用いることができる。分詞節は同時性があるときにも、ないときにも用いることができる。

(3) ジェロンディフは既知 (*acquis*) のことがらを表し時の定位点となる。

(10) *Je chante en me rasant.* 私は髭を剃るときは歌を歌う。

(11) *Je me rase en chantant.* 私は歌いながら髭を剃る。

On peut dire que dans (10) le syntagme gérondif désigne un fait connu, dans (11) un fait non-connu. C'est cette opposition qui produit les interprétations différentes de (10) et de (11), de sorte que (10) est regardé comme un repère temporel, (11) comme une circonstance concomitante. En d'autres termes, la possibilité pour une forme en *-ant* de constituer un repère temporel est inversement proportionnelle au degré de nouveauté de l'action verbale. Pour désigner ce caractère connu ou non-connu d'un énoncé, j'emploierai désormais le terme *acquis*. (Gettrup 1977 : 218)

(10)のジェロンディフは既知の事行を、(11)は未知の事行を表していると言うことができる。この違いが(10)と(11)の解釈の違いを生み出し、(10)は時の定位点と見なされるのにたいして、(11)は付帯状況と見なされるのである。換言すると、*-ant* という形式 [=現在分詞] が時の定位点となることができるかどうかは、[現在分詞に置かれた] 動詞が表す事行の新しさの度合いに反比例する。発話の既知・未知というこの性質を、以後「既知」(*acquis*)という用語で呼ぶことにする。

【解説】

主節とジェロンディフを入れ替えた (10) と (11) では、ジェロンディフの意味解釈が異なると著者は言う。(10) は *Je chante quand je me rase.* と同じ意味で、ジェロンディフ *en me rasant* は時の定位点となる。一方、(11) のジェロンディフは時の定位点ではなく、主節の付帯状況（様態）である。このちがいは二つの行為のどちらがよりありふれたものかによると著者は言う。「髭を剃る」は男性が毎朝することでありふれている。しかし「歌う」は誰でもが毎日することではない。*nouveauté* 「新奇さ」という点では、「歌う」の方が「髭を剃る」より未知性が高い。*Gettrup* はありふれた既知の出来事が主節の表す出来事の定位点となるとする。次の引用を参照のこと。

(4) 既知 (*acquis*) にもいろいろな種類がある。

Dans (10) et (11) le degré d'*acquis* dépend de faits extra-linguistiques. Si *en me rasant* est considéré comme une chose connue, cela tient au fait qu'il s'agit d'un acte dont tout le monde sait qu'il a lieu à des intervalles réguliers. Dans ce cas on peut parler d'un *acquis* existentiel. Mais, évidemment, l'*acquis* peut aussi provenir de faits contextuels, si, par exemple, un gérondif reprend quelque chose de déjà mentionné.

(12) elles disaient à ma mère que j'étais « une vraie petite maman ». *En disant ça* elles se penchaient vers moi avec une figure molle comme si elles allaient se mettre à couler.

(*Gettrup* 1977 : 218)

(10)と(11)の既知の度合いのちがいは言語外的事実によっている。「髭を剃る」が既知と見なされるのは、誰もが定期的に行う行為だとわかっているからである。このようなケースは「実質的既知」と呼ぶことができる。しかしもちろん既知が文脈的に得られることもあり、例えばジェロンディフが一度言及されたことを取り上げるときがそうである。

(12) その女性たちは、私のことを「ほんとうにお母さんを小型にしたよう」だとよく母に言っていた。そう言うとき、その女性たちは私の方に屈んで、まるで今にもとろけそうな優しい顔を向けるのだった。

(5) 予測可能なものも既知に含まれる。

... souvent le syntagme désigne, non un fait connu, mais un fait prévisible, un fait auquel on s'attend parce que, d'habitude, il se produit dans telle ou telle situation. La prévisibilité, elle aussi, réduit la valeur d'information d'un syntagme gérondif de manière à lui imposer une interprétation temporelle:

(13) Tout était si clair dans sa tête, qu'*en levant les yeux* il s'étonna de voir autour de lui des murailles de livres au lieu de l'espace infini.

On peut prévoir que cet acte ne se prolongera pas indéfiniment : tôt ou tard il lèvera les yeux de dessus la carte. *Lever les yeux* étant préparé par la situation, cet acte est perçu comme un repère temporel.

(*Gettrup* 1977 : 218)

ジェロンディフ句は既知のことからではなく予測可能なことを表すこともある。予測可能なのは、それがかくかくしかじかの状況で起きることがあらかじめわかっているからである。予測可能性もまたジェロンディフ句の情報価値を下げ、その結果、ジェロンディフが時の解釈を受けることになる。

(13) 彼の頭の中ではすべてが明らかだった。そのため目を上げた時、彼の目に映ったものが無限に広がる空間ではなく、本の壁だったことに驚いた。

(地図を子細に検討するという) その行為を際限なく続けることができないことは予測できる。遅かれ早かれ彼は地図から目を上げることになる。「目を上げる」はこのように状況によって準備されているので、この行為は時の定位点と見なされる。

【解説】

ここで Gettrup はジェロンディフが主節にたいして時の定位点になりやすい条件を考察している。ジェロンディフが「既知」(acquis) のことがらを表すとき定位点として働くとしているが、その内容は三つに分かれる。

① 「髭を剃る」のように日常的に繰り返されるありふれた行為は既知となる。

② 先行文脈ですでに言及されている出来事は既知となる。

③ 「地図を見る」→「目を上げる」のように、予測可能な行為は既知となる。

ジェロンディフが既知のことがらを表すという主張は、Franckel (1989) と Herslund (2006) で形を変えて引き継がれているので、それらを見ると改めて検討する。

(6) 分詞節に「時」の意味はない。

Mon but principal dans cette étude sera de montrer que le comportement du participe présent diffère, à plusieurs points de vue, de celui des autres indications de temps, et que ces différences de comportement remettent en question l'idée que le participe présent aurait un sens temporel. (Gettrup 1977 : 251)

本研究の主要な目的は、現在分詞の振る舞いは多くの点で他の時の表現とは異なることを示し、そのちがいを基にして現在分詞に時の意味があるという考えを批判することにある。

(7) 分詞節は主節のように振る舞う。

(8) *Prenant Urbain à bout de bras, il le déposa doucement sur le sol.* (Aymé, *La vouivre*)

ユルバンを腕の先で持ち上げると、彼はゆっくりと地面に降ろした。

Gettrup はこのように二つの出来事に同時性がなく、次々に起きた場合、分詞節は主節と同じように振る舞うとしている。次のように書き換えられる。

(8)' *Il prit Urbain à bout de bras et le déposa doucement sur le sol.*

彼はユルバンを腕の先で持ちあげた。そして彼をゆっくりと地面に降ろした。

Gettrup は分詞節が主節のように振る舞うことを証明するために *donc* を使う。*donc* は〈A, *donc* B〉のように用いるとき、二つの主節 A と B の間の論理的関係を表す。

i) *Je pense, donc je suis.* (Descartes)

我思う、ゆえに我あり。

興味深いのは、〈A. *Quand* B, *donc* C〉のように間に *quand* 節が割って入る場合である。

(86) *J'avais fini de travailler. Quand tu es entré, tu ne m'as donc pas dérangé.*

私はもう仕事を終えていた。だから入って来た時、君は私の邪魔をしたわけではない。

donc は *J'avais fini de travailler* と *tu ne m'as pas dérangé* の間の関係を表し、途中に挿入された *quand* 節を飛び越える。したがって *quand* 節を主節に書き換えると、論理関係がおかしくなり容認されない。このように *donc* は主節と主節の関係を表す。

(86)' **J'avais fini de travailler. Tu es entré, et tu ne m'as donc pas dérangé.*

私はもう仕事を終えていた。君が入って来た。だから君は私の邪魔をしたわけではない。

このテストを現在分詞とジェロンディフに適用すると次のようになる。

(87) *En arrivant sur la route, elle eut **donc** une mauvaise surprise.*

道路までやって来た時、だから彼女は思いがけない困ったことごとになった。

(87)' *? *Arrivant sur la route, elle eut **donc** une mauvaise surprise.*

(87)のジェロンディフは従属節として働き、**donc** は前にあるはずの主節と *elle eut une mauvaise surprise.* の関係を正しく示す。一方、(87)' の分詞節は容認されない。それは分詞節は主節として働くため、**donc** が分詞節と主節を結びつけてしまうためだといっているのである。

(8) ジェロンディフは、*après...*などの他の時間表現と共起できる。

(89) *Fatigué en quittant le lycée, après tes six heures de classe ... tu as fait tout un grand détour jusqu'à l'Île de la Cité. (Butor, *Degrés*)*

6 コマの授業の後で高校を出る時、疲れ切っていたので、君はシテ島までぐるっと大きく回り道をした。

しかし次の例が示すように、現在分詞は他の時間表現と共起しない。これは現在分詞に「時」の意味がない証拠であるとする。

(89)''' **Fatigué, quittant le lycée, après tes six heures de classe ...*

(9) 主節が être / avoir の半過去するとき、ジェロンディフは可能だが現在分詞は不可

(51) *{En sortant / *Sortant} de chez lui, vers huit heures du matin, Maigret avait le choix entre trois démarches.*

朝の 8 時頃、自宅を出る時、メグレには取るべき 3 つの行動の選択肢があった。

【解説】

後で見るように、春木 (1992) は『前置詞活用辞典』(大修館、1983) の記述を引いて、主節動詞が avoir, être のとき、付帯する動作をジェロンディフで表せないとする。

**Elle restait à la maison en lisant des livres.*

彼女は読書をして家にいた。

Gettrup の例は前置され時の定位点となる場合で、春木の引く例は後置された状況補語としてのジェロンディフというちがいはあるが、まったく逆の結果となっていることが興味深い。春木の引く例は、おそらく分詞節にすると容認される。

Elle restait à la maison, lisant des livres.

(10) ジェロンディフと同じく、**quand** 節も予測可能なことがらを表す。**comme** 節はその限りではない。(22)で宝飾店の前を通るのは、それまでの主人公の行動から予測できないので **quand** 節は容認されない。(23)ではサン・ミシェル大通りを下ればサン・ジェルマン大通りの角に出るのは予測できるので、**quand** 節は容認される。

(22) *Il poursuivit son chemin. { Comme / *Quand } il passa devant une joaillerie, il vit une bague qu'il crut reconnaître. 彼はさらに道を進んだ。とある宝飾店の前を通った時、見覚えのあるような気がする指輪を見かけた。*

(23) *Il descendit le boulevard Saint-Michel. { Comme il arrivait / Quand il arriva } au*

carrefour Saint-Germain, il vit qu'il n'était que moins dix.

彼はサン・ミシェル大通りをセーヌ川の方へ下って行った。サン・ジェルマン大通りの角に着いた時、まだ 10 分前であることに気づいた。

3.3. Franckel (1989)

Franckel は Antoine Culioli (1924-2018) の弟子である。Culioli は Gustave Guillaume と Émile Benveniste の影響を強く受けて、*Théorie des opérations énonciatives* 「発話操作理論」と呼ばれる独自の言語理論を作り上げた。Franckel の論文を理解するためには、その知識が必要である。発話操作理論には次のような特徴がある。

[1] 構造主義や生成文法のように、文の統語構造を自律的な対象と見なすのではなく、文を発話 (énoncé) と捉えて、発話者 (énonciateur) がどのような心的操作を積み重ねてその発話を作り上げたのかを考察する。

[2] 発話に現れる言語マーカー (marqueur) を、発話者が行なった心的操作の痕跡とみなす。言語マーカーというのは、冠詞、指示詞、前置詞、動詞の時制などの文法的要素を全部さす。

[3] 発話は発話者が心的操作を積み重ねて作るとされているので、構造主義や生成文法のように文が一気に出来上がると考えるのではなく、発話が出来上がる順序があると考え。この「順序」がこの理論ではとても重要である。préconstruit 「既構築」と呼ばれているのはこの順序が関係している。たとえば次の例では、主節 *on a le droit de s'exprimer* が作られる前に、文頭の状況補語句 *En France* が作られるので、*En France* は préconstruit として働くと考える。

En France, on a le droit de s'exprimer.

フランスでは人は意見を述べる権利がある。

[4] 言語マーカー同士の関係を repérage 「定位」と呼ぶ。A が先に作られて (既構築)、それを手がかりにして B が作られるとき、*B est repéré par rapport à A*。「B は A に対して定位される」という。repère はときに localisateur と呼ばれることもある。

(1) *Un procès au gérondif (forme en + participe présent) fonctionne comme localisateur d'un autre procès qui lui confère en retour les déterminations modales, aspecto-temporelles et personnelles dont il est par lui-même démuné.* (Franckel 1989 : 169)

ジェロンディフ (en + 現在分詞) に置かれた事行は、他の事行の定位点として働く。このとき他の事行は、ジェロンディフに欠けている法的限定、アスペクト・時制の限定、人称の限定を付与する。

【解説】

Gettrup と同じく、Franckel もまた前置されたジェロンディフは主節が表す事行に対して時の定位点となるとする。ただし、ジェロンディフには人称も時制も法もアスペクトもないので、それを主節からもらうとしている。

i) *En écoutant la radio, il a appris la mort de Michael Jackson.* [作例]

ラジオを聴いて、彼はマイケル・ジャクソンの死を知った。

主 節は 3 人称 (il)・直説法・複合過去なので、ジェロンディフも 3 人称・直説法・

過去という素性をもらう。cf. *Comme il écoutait la radio...*

(2) Franckel は主節の前に置かれたジェロンディフと後に置かれたジェロンディフの働きは異なるとする。その主な考えは次のとおりである。

① 前置されたとき、ジェロンディフは「節と節を結ぶ」(interpropositionnel) 働きを持つ。次の例は *Pendant que je lui écrivais...* と書き換えることができ、ジェロンディフは従属節と同じ働きをする。

En lui écrivant, les larmes me montaient aux yeux.

彼女に手紙を書いていると、私の目に涙が溢れた。

② 後置されたときジェロンディフは「節の内部で」(intrapropositionnel) 働く。

Il lui répondit en souriant,

彼は微笑みながら彼女に答えた。

後置されたジェロンディフは主節動詞の状況補語である。このときジェロンディフは *préconstruit* でもなく *localisateur* でもない。後置ジェロンディフを Franckel は *spécifiant* 「特定化辞」と呼んでいる。動作 (*répondit*) が行われた様子をより詳しく述べているからである。

ジェロンディフが前置されたときと後置されたときとははっきり区別しているのが Franckel の研究の特徴である。多くの研究ではこの点に触れられていない。

(3) Franckel (1989) で最も興味深いのは次の例文をめぐる考察である。(例文番号は原文のまま)

(1) *En sortant, j'ai claqué la porte.*

外に出る時、私はドアをバタンと閉めた。

(2) *En partant, je l'ai injurié,*

立ち去る時、私は彼をののしった。

(3) *En allant à Besençon, je suis passé par Dijon.*

ブザンソンに行く時に、私はディジョンを経由した。

(4) *En mourant, il a murmuré son nom.*

死に際に彼は彼(女)の名をつぶやいた。

(1)～(4) の主節をジェロンディフに、ジェロンディフを主節に変えると容認度が低くなる。

(1a) ?*En claquant la porte, je suis sorti.*

(2a) ?*En l'injuriant, je suis parti.*

(3a) ?*En passant par Dijon, je suis allé à Besençon.*

(4a) ?*En murmurant son nom, il est mort.*

次に (1a)～(3a) の主節を書き換えて次のようにすると容認度が上がるという。

(1b) *En claquant la porte, j'ai réveillé tout le monde.*

ドアをバタンと閉めたせいで、私はみんなを起こしてしまった。

(2b) *En l'injuriant, je me suis ridiculisé.*

彼をののしったことで、私は笑いものになった。

(3b) *En passant par Dijon, j'ai acheté de la moutarde.*

ディジョンに寄った折りに、私はマスタードを買った。

(1a)～(4a) のジェロンディフと主節の順番を入れ替えると問題なく容認される。

(1c) Je suis sorti *en claquant la porte*.

私はドアをばたんと閉めて外へ出た。

(2c) Je suis parti *en l'injuriant*.

私は彼をののしって立ち去った。

(3c) Je suis allé à Besançon *en passant par Dijon*.

私はディジョンを経由してブザンソンに行った。

(4c) Il est mort *en murmurant son nom*.

彼は彼（女）の名を呟きながら亡くなった。

(1)～(4)のジェロンディフと主節の順番を入れ替えても容認される。

(1d) J'ai claqué la porte *en sortant*.

私は外へ出る時にドアをばたんと閉めた。

(2d) Je l'ai injurié *en partant*.

私は去り際に彼をののしった。

(3d) Je suis passé par Dijon *en allant à Besançon*.

私はブザンソンに行く時にディジョンに立ち寄った。

(4d) Il a murmuré son nom *en mourant*.

彼は死に際に彼（女）の名を呟いた。

つまり、(1) と (1d) のように、ジェロンディフを前置しても後置しても容認される場合と、(1c) と (1a) のように、後置は可能だが前置はできない場合があるということである。ちなみに前置は可能だが後置はできないという例は挙げられていない。つまり、ジェロンディフは前置に問題があるということである。これはなぜだろうか。

(1) *En sortant, j'ai claqué la porte*.

外に出る時、私はドアをバタンと閉めた。

(1d) J'ai claqué la porte *en sortant*.

私は外へ出る時にドアをばたんと閉めた。

(1c) Je suis sorti *en claquant la porte*.

私はドアをばたんと閉めて外へ出た。

(1a) ?*En claquant la porte, je suis sorti*.

(4) Franckel はこの問題を解決するために、ジェロンディフに置かれた動詞が持っている語彙的アスペクトのちがいを持ち出している。

De façon générale, on notera qu'entre deux verbes dont l'un réfère en particulier à un franchissement de frontière et peut être, à ce titre, qualifié de notionnellement discret (par exemple *sortir, franchir, arriver, réussir*) et l'autre qui se présente comme compact, c'est le premier qui, au niveau des relations primitives, tend à fonctionner comme repère du second.

Plus brutalement, on pourrait dire que le (notionnellement) délimité sert de repère au non délimité et non inverse. (...) Ainsi, un verbe comme *injurier* qui du point de vue de ses propriétés notionnelles ne renvoie pas a priori à un changement d'état se trouve discrétisé dès lors qu'il fait l'objet d'un emploi au gérondif avec la fonction de repère (...) Le verbe *injurier*

ne jouant pas, *a priori* le rôle d'un repère temporel du fait de ses propriétés lexicales, la seule contrainte d'ordre sémantique, est qu'il soit interprétable comme source d'une relation causale.

Si cette condition n'est pas remplie, on obtient des énoncés malformés comme (1a) ou (2a). Dans (2a) (*?en l'injuriant, je suis parti*) par exemple, *injurier* n'est pas interprétable comme cause de *partir*. (...) D'autre part, *partir*, qui est un verbe fortement discret et susceptible en outre de fonder une localisation temporelle, tend bien davantage à fonctionner comme repère de *injurier* que l'inverse. Par contre l'énoncé (2b) *En l'injuriant, je me suis ridiculisé* est bien formé, dès lors qu'une relation causale s'établit naturellement. *En l'injuriant* réfère alors nécessairement à un changement d'état. (Franckel 1989 : 178)

一般的に言って、二つの動詞のうち一つが特に状態変化を表している（例えば「外に出る」「跨ぐ」「到着する」「成功する」）、概念的に離散的であると見なされ、もう一つの動詞が稠密であるときには、基本的関係のレベルにおいて、一つ目の動詞が二つ目の動詞に対して定位点の役割を果たすことに注意しよう。

もっとざっくり言うと、(概念的に) 限界点のあるものがそうでないものに対して定位点として働くのであり、その逆ではない。(…) 例えば、「ののしる」という動詞は、概念的特性の観点からは、アプリアリに状態変化を表すとは言えない。ところが定位点の機能を持つジェロンディフに置かれることによって、離散化されるのである。(…) 「ののしる」という動詞はその語彙的特性からして時の定位点の役割を持たないので、そこから生じる唯一の意味的制約は、「ののしる」のジェロンディフが「原因」として解釈できなくてはならないということになる。

もしこの条件が満たされないときは、(1a) や (2a) のような不適格な発話ができる。例えば (2a) の「?彼をののしって私は立ち去った」では、「ののしる」は立ち去ることの原因と解釈することはできない。(…) 一方、「立ち去る」は極めて離散的で、おまけに時間的な定位をすることができるので、「ののしる」に対して定位点として働くのであり、その逆ではない。これに対して、(2b) 「彼をののしったために、私は笑いものになった」は適格である。その理由は原因と結果の関係が自然に得られるからである。「彼をののしった」はこのとき、必然的に状態変化を表すことになる。

【解説】

まず用語をいくつか説明しよう。discret「離散的」は数学の用語で、連続的ではなくとびとびの値を取ることをいう。言語学では動詞の持つ語彙的アスペクトにおいて、自然な始まりと終わりがあることを指す telic「完結的」と同じ意味と見なしてよい。Vendler のアスペクト分類では、entrer、arriver、sortir などの achievement「到達動詞」がその典型である。

これにたいして compact「稠密、コンパクト」とは、自然な始まりと終わりがなく、動作のどの部分をとっても同じ性質の部分集合を得るものをいう。Vendler の分類では、être や habiter などの state「状態動詞」と、marcher、courir などの activity「活動動詞」がこれに当たる。

discréteriser「離散化する」は、本来なら稠密なアスペクトを持つ動詞が、他の要因によって始まりと終わりを持つようになることを言う。たとえば connaître は典型的な状

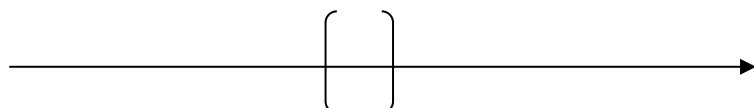
態動詞で稠密だが、複合過去形に置かれると「知り合う」という意味になり離散化される。

i) Je connais M. Durand. 私はデュランさんを知っている。

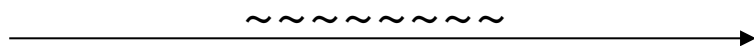
ii) J'ai connu Marie au lycée. 私はマリーと高校で知り合った。

いま二つの事行があり、片方が離散的でもう片方が稠密であるとする。例えば、一つは sortir「外出する」、もう一つは porter un chapeau noir「黒い帽子を被る」だとする。

到達動詞 sortir のアスペクト図式 (離散的)



状態動詞 porter un chapeau noir のアスペクト図式 (稠密)



Franckel が主張しているのは、離散的な sortir が稠密な porter un chapeau noir に対して定位点となりやすく、その逆ではないということである。次は作例だが、iv)より iii)の方が自然な文である。しかも iv)の porter は「身に付けている」という状態ではなく、mettre と同じく「身に付ける」という動作の意味になる。

iii) Quand il sort, il porte un chapeau noir. 外出するとき、彼は黒い帽子を被る。

iv) Quand il porte un chapeau noir, il sort. 黒い帽子を被るとき、彼は外出する。

離散的な動詞が定位点となるのは、離散的な事行には始まりと終わりがあり、時間軸上に位置づけることができるが、稠密な事行には始まりと終わりがなく、どの部分を取っても同じ事態を表すために、事行を時間軸上に位置づけることが難しいからである。

また Franckel は discret「離散的」であることと状態変化を表すことを同一視しているようである。本来、この二つの概念は同一ではない。しかしここは Franckel に従って、上の例がどのように説明できるか見てみよう。

(1) *En sortant*, j'ai claqué la porte.

外に出る時、私はドアをバタンと閉めた。

(2) *En partant*, je l'ai injurié,

立ち去る時、私は彼をののしった。

(1)と(2)では前置ジェロンディフの動詞 sortir, partir は離散的で状態変化を表す。前置ジェロンディフが主節に対して時の定位点となる条件は満たされている。

(1a) ?*En claquant* la porte, je suis sorti.

(2a) ?*En l'injuriant*, je suis parti.

これにたいして (1a) (2a) では条件が満たされていない。離散的ではなく状態変化を表さない claquer la porte, injurier が前置ジェロンディフに置かれているからである。

(1a) (2a)は次のようにジェロンディフを後置すると容認される。このときジェロンディフは時の定位点ではなく様態 (*manière*) を表す状況補語である。したがって離散的でない動詞でも問題ない。

(1c) *Je suis sorti en claquant la porte.*

私はドアをばたんと閉めて外へ出た。

(2c) *Je suis parti en l'injuriant.*

私は彼をののしって立ち去った。

(1a) (2a)の主節を次のように変えると容認される。

(1b) *En claquant la porte, j'ai réveillé tout le monde.*

ドアをボタンと閉めたせいで、私はみんなを起こしてしまった。

(2b) *En l'injuriant, je me suis ridiculisé.*

彼をののしったことで、私は笑いものになった。

このときジェロンディフは時の定位点ではなく、理由・原因を表す従属節である。そう解釈するためには「ドアをばたんと閉める」→「みんなを起こす」、「彼をののしる」→「笑いものになる」のように因果関係がなくてはならない。

(5) Le caractère peu naturel de (3a) *En passant par Dijon, je suis allé à Besançon* relève d'une contrainte de nature un peu différente. Elle tient au fait que les relations primitives entre PG (=proposition en gérondif) et PP (=proposition principale) bloquent la possibilité de construire PP à partir de PG : le but n'est pas construit à partir de l'itinéraire, l'enchaînement est inverse. Etant donné un but, on fixe un itinéraire pour l'atteindre. La construction de PP est donc première, ce qui bloque le fonctionnement de PG comme repère de l'énoncé et par conséquent, sa position en tête de l'énoncé. (Franckel 1989 : 179)

(3a)「ディジョンを経由したとき、私はブザンソンに行った」が自然な発話ではないのは、これとは少し異なる制約による。ジェロンディフ句と主節の間の原始的関係のせいで、ジェロンディフ句を出発点として主節を構成することができないのである。目的地は旅程を基にして決められるのではない。順序が逆である。まず目的地があり、そこに到達するために旅程を決めるのである。したがって主節がまず構築されなくてはならない。このためにジェロンディフ句が発話の定位点として働くことができず、文頭に立つことができないのである。

【解説】

ここでは Franckel は少しちがう理由を持ち出している。それは「世界知識に基づく語用論的な順序」というものである。旅行するとき、まず目的地を決めてからどこを通過に行くかという旅程を決める。その逆ではない。このため目的地は旅程に対して定位点となるが、逆に旅程は目的地にたいして定位点とはならない。武本 (2004) の「セッティング」と似たところがあり、後ほど併せて考察する。

(6) 前置されたジェロンディフは既構築である

En tant que support premier des opérations de repérage constitutives de l'énoncé, le procès PG ne fait pas l'objet d'une prédication existentielle au sein même de l'énoncé. Il a nécessairement fait par ailleurs, ne serait-ce qu'implicitement, l'objet d'une première détermination : comme tout repère, il implique un **préconstruit** dont il constitue une forme de

reprise.

(Franckel 1989 : 173)

発話を作る定位操作の最初の土台となるものとして、ジェロンディフ句が表す事行は当該の発話の中においては存在叙述の対象とはならない。しかしながらジェロンディフ句が表す事行は、たとえ暗黙のうちであるとしても、必ずどこかで最初の限定操作を受けている。あらゆる定位点と同じく、ジェロンディフ句が表す事行には、それより前に「既構築」(préconstruit) があることを前提としている。ジェロンディフ句はその既構築を受ける。

【解説】

Franckel はここで名前は出していないが、Gettrup と同じようにジェロンディフは既知のことがらを表すという主張をしている。「ジェロンディフの内容は存在叙述の対象とはならない」というのは、「(暗黙のうちにでも) 前提されていて断定されていない」という意味である。

i) *En l'injuriant, je me suis ridiculisé.*

彼をののしったことで、私は笑いものになった。

Franckel は次のようにパラフレーズできるとしている。

ii) *Je l'ai injurié et ce faisant, je me suis ridiculisé.*

私は彼をののしり、そうしたことによって笑いものになった。

Franckel によれば、ジェロンディフ *en l'injuriant* は、既構築である *je l'ai injurié* を受ける照応であって、*ce faisant* と同じ働きをするとされる。ただし、Franckel はこのようなアイデアを出すに留まり、実例を示して論証していない。

3.4. Herslund (2006)

少し年代が飛ぶが、Franckel の主張を用例によって論証しようとした Herslund (2006) を見てみよう。

(1) ジェロンディフは旧情報を表す

Pour servir du point d'ancrage temporel, il faut de l'information acquise : le gérondif est donc en quelque sorte prévu ou prévisible. C'est en effet la découverte fondamentale de Gettrup (1977) que le gérondif, contrairement au participe présent, apporte toujours de l'information connue, prévisible ou présumée. (Herslund 2006 : 381)

時間的な繫留点となるためには、既知の情報が必要である。このためジェロンディフはいわば予測されるか予測可能である。現在分詞と異なり、ジェロンディフは常に既知か予測可能か前提された情報を表すということは、Gettrup (1977) の重要な発見である。

(2) ジェロンディフは一種の「動詞の照応形」である

Pour pouvoir servir de repère temporel, le gérondif doit être situé temporellement lui-même. Comme cette forme non finie du verbe ne comporte aucune autre indication temporelle que celle de la concomitance, elle doit trouver sa référence temporelle ailleurs et, par sa valeur de concomitance, répéter en quelque sorte cette référence: (...) D'où l'idée que le gérondif constitue une anaphore verbale. Deux cas se présentent :

1. Le gérondif puise sa référence temporelle dans une connaissance du monde générale, c'est-à-dire qu'il reproduit une référence générale ou habituelle.
2. Le gérondif puise sa référence temporelle dans le contexte précédent en reprenant un

élément de ce contexte, auquel il emprunte l'information temporelle nécessaire à situer son verbe principal. (Herslund 2006 : 381-382)

時間の定位点となるために、ジェロンディフはそれ自身が時間的に定位されなくてはならない。しかしジェロンディフは活用されていない動詞形であるために、(主節との) 同時性以外のいかなる時間的な特性も持たない。したがって時間的指示はどこか別の所に求めるしかない。同時性によっていわば見つけたその指示を反復するわけである。(…) ここからジェロンディフが一種の動詞照応だという考えが導かれる。二つのケースがある。

1. ジェロンディフは誰もが持つ世界知識から時間指示を得る。つまり誰もが知っている指示や習慣的指示を複製する。
2. ジェロンディフは先行文脈から時間指示を得て、先行文脈の一部を反復する。主節を時間軸に位置づけるのに必要な時間的情報を、先行文脈から取得する。

【解説】

Gettrup がジェロンディフは「既知」(acquis) のことがらを表すとし、Franckel がジェロンディフは「既構築」(préconstruit) であるとしたアイデアを一步進めて、Herslund はジェロンディフを動詞の照応形だとする。つまり、un garçon → le garçon が名詞の照応であるのと同じように、ジェロンディフはどこかにすでにある動詞的意味を受け取る照応だというのである。Herslund は次の例を挙げている

(6) Laurent se donna la tâche de passer chaque matin par la Morgue, en se rendant à son bureau. (Zola, *Thérèse*)

ローランは、毎朝通勤の途中に、死体公示所にわざわざ足を運んだ。

(7) Une semaine plus tard la petite captive avait repris conscience. En ouvrant les yeux, elle avait aperçu (...) le très doux et très beau visage de son père.

(Mourad, *Princesse*)

一週間後に、誘拐されていた少女は意識を取り戻した。目を開けた時、そこには父親の優しくて立派な顔があった。

(6) のジェロンディフ en se rendant au bureau は、その前にある chaque matin と相まって、誰もが毎日繰り返す「通勤」を表す。ジェロンディフは「世界知識」に基づいて「毎朝の通勤時」という時間的定位を行う。

(7) のジェロンディフ en ouvrant les yeux は、先行文脈の la petite captive avait repris conscience が表す事行の一部を反復している。「目を開ける」は「意識を取り戻す」という出来事の一部である。したがってこのジェロンディフは先行文脈の情報を部分的に照応することで、時間的定位を実現しているというのである。

(3) 名詞句の照応には次のようなタイプがある。

① 忠実照応 (anaphore fidèle) : 同じ名詞句を繰り返す : un garçon → le garçon

② 非忠実照応 (anaphore infidèle) : 別な名詞句に置き換える :

le Japon → le pays du soleil levant

③ 連想照応 (anaphore associative) : 「全体・部分」などの関係に基づいて新しい指示対象を導入する :

Il s'abrita sous un vieux tilleul. Le tronc était tout craquelé.

彼は菩提樹の古木の下で雨宿りした。幹はすっかりひび割れていた。

- ④ 要約照応 (anaphore résomptive) : 先行文脈の内容を別な単語で言い換える :

Hier soir, un avion s'est abîmé dans l'Atlantique. *Cet accident...*

昨晚、飛行機が大西洋に墜落した。この事故で…

Herslund はジェロンディフによる照応にも同じタイプがあるとする。

- a. 忠実照応

Le 12 juin, il renvoyait les ministres girondins. (...) *En renvoyant* les Girondins de son gouvernement, Louis XVI agissait conformément à la Constitution.

6月12日にルイ16世はジロンド派の大臣たちを罷免した。(…)ジロンド派を政府から放逐することで、ルイ16世は憲法に則った行動をしたのである。

- b. 非忠実照応

Peu à peu le sommeil le prit. (...) *En s'endormant*, il décida qu'il attendrait une occasion favorable.

少しずつ眠気が襲って来た。(…)眠りに就きながら、彼は好機を待とうと決めた。

- c. 連想照応

La sonnerie du téléphone l'arracha à un sommeil agité. (...) « J'ai sans doute un peu trop bu » pensa-t-elle *en décrochant* enfin.

電話が鳴る音で彼女は浅い眠りから覚めた。(…)ようやく受話器を取りながら、「ちょっと飲み過ぎたんだわ」と彼女は思った。

- d. 要約照応

Trois cognacs sans glace, s'il vous plaît. (...) *En attendant* les consommations, François observait l'assistance.

氷抜きのコニャックを3つ下さい。(…)飲み物が運ばれて来るのを待ちながら、フランソワはその場に居た人々を眺めた。

- e. 間接照応

Merci, Papa, pour les articles du *Monde* et de l'*Humanité* que tu m'as découpés (...) J'ai eu un sentiment bizarre *en les lisant*.

パパ、切り抜いてくれたルモンドとユマニテの記事、ありがとう。(…)僕はその記事を読んだとき、奇妙な感じを抱いた。

3.5. ジェロンディフは既知情報を表すか

Gettrup (1977), Franckel (1989), Herslund (2006) は、主節に前置され、時の定位点となるジェロンディフは、既知情報・前提された情報・予測可能な情報・情報価値の低い情報を表すとしている。その一方、この点にまったく触れない研究も多く、定説とはなっていない。この問題を少し考えてみよう。

(4) Gettrup (1977) は、どのような種類の動詞がジェロンディフに置かれたときに時の定位点になりやすいかを考察している。

... j'ose prétendre que les verbes de mouvement ont une valeur d'information relativement faible. Ils sont, pour ainsi dire, destinés à représenter l'action secondaire. (Gettrup 1977 : 223)

Je retiendrai seulement que, dans les syntagmes gérondifs temporels, on observe une fréquence assez importante de verbes perfectifs de mouvement, d'expérience, de perception, et de verbes désignant des actions qui se répètent à intervalles réguliers (*se lever, se coucher, manger*). (Gettrup 1977 : 225)

私は移動動詞には比較的低い情報価値しかないと考える。移動動詞には、言うなれば副次的な行為を表す役割があるのである。

私は次の点を明記しておこう。時の意味を持つジェロンディフでは、移動動詞・経験動詞・知覚動詞のような完了動詞や、「起きる」「寝る」「食事をする」のように、定期的に行われる行為を表す動詞が高い頻度で見られる。

(2) ジェロンディフが完了動詞で、主節が単純過去・複合過去するとき、ジェロンディフは時の意味になりやすい。(Gettrup 1977 : 232)

(36) *En arrivant tout près de la maison, il remarqua son aspect étrange, et la disparition de la moitié du second étage.*

家のすぐ近くまで来たとき、彼は家の奇妙な様子と、3階が半ばなくなっていることに気づいた。

(40) *En quittant notre salle de rédaction, elle me tendit le journal et, avec sa moue habituelle, osa me dire...*

うちの社の編集部の部屋を出るとき、彼女は私に新聞を差し出して、いつものふくれっ面をして次のように言った。

(45) *En la voyant, les jumeaux poussèrent un glapisement joyeux.*

彼女の姿を見ると、双子は喜んで甲高い声をあげた。

(3) Tous présentent une structure syntaxique et sémantique assez simple ; verbe de mouvement + complément de circonstance ou d'objet désignant le point de départ ou d'arrivée, verbe + complément d'objet. (...) Dans tous les exemples, il s'agit d'actions connues ou prévisibles : acquis contextuel dans (44-45), existentiel dans les autres, p. ex. *en sortant du magasin, en quittant notre salle de rédaction* : comme on ne peut pas rester là éternellement, *sortir* et *quitter* sont préparés par la connaissance que nous avons de notre comportement dans le monde. (Gettrup 1977 : 233)

これらの例はすべて単純な統語的・意味的構造をしている。移動動詞+状況補語または出発点や到着点を目的補語、動詞+目的補語である。(…)すべての例において、既知の行為または予測可能な行為が述べられている。(44-45)では文脈的な既知で、他の例では実質的な既知である。たとえば「店を出たとき」「うちの社の編集部の部屋を出るとき」などがそうである。永遠にその場にいることはできないので、「出る」「離れる」などの行為は、この世界で私たちが行う行動について持っている知識によってあらかじめ準備されているのである。

(4) ジェロンディフがなぜ時の定位点となれるのかを説明するためには、先行文脈を考慮する必要がある。

... le fait que ce soit le gérondif qui détermine temporellement le prédicat principal et non l'inverse pose le problème de l'origine de cette faculté de repère et surtout conduit par là-même à voir au-delà des limites de la phrase-hôte. Un exemple classique comme « En entrant dans le salon, Paul trébucha sur un chat européen » (...) invite en effet à dépasser le

cadre de la seule phrase et pousse à retrouver (...) dans un contexte amont ou dans un ensemble informationnel plus large, la justification du pouvoir localisateur temporel du gérondif. (Kleiber 2008 : 110)

主節の述語の時を定めるのがジェロンディフであり、その逆ではないことによって、ジェロンディフが時の基準点となる能力がどこから来るのかという問題が生じる。またジェロンディフが置かれている文の境界を越えて考察することがとりわけ必要になる。「客間に入ったとき、ポールはヨーロッパ猫につまづいた」のような古典的な例を見ると(…)、実際にひとつの文の境界を越える必要があり、それより上流の文脈か、より広い情報の集合の中に、ジェロンディフが持つ時の定位点となる能力の起源を探さなくてはならないのである。

【解説】

En entrant dans le salon, Paul trébucha sur un chat européen. 「客間に入ったとき、ポールはヨーロッパ猫につまづいた」が提起する問題と Kleiber が述べているのは、次のようなことである。

- ① ジェロンディフ *En entrant dans le salon* が主節の表す事行を時間軸に位置づける定位点の役割を果たす。その逆ではない。
- ② それならばジェロンディフの表す事行は、主節に先立って時間軸に位置づけられていなくてはならない。
- ③ しかるにジェロンディフには、法も人称も時制もない。従ってジェロンディフが事行を独力で時間軸に位置づけることはできないはずである。
- ④ もしそうならば、ジェロンディフが時の定位点となるために、どこか別の所から力を借りているはずである。

(5) Kleiber は Herslund (2006) が主張するように、ジェロンディフは動詞の照応形だという考えを否定する。Kleiber の考え方は、二つの行為の主従関係という前提である。Nous avons montré ailleurs à propos de *Paul chante en se rasant* que le responsable n'était pas le connu ou le prévisible extra-linguistique, mais l'asymétrie a priori qui caractérise l'association simultanée des prédicats *chanter* et *se raser* avec un même sujet. Si *en se rasant* est repère temporel pour *chanter* dans *Paul chante en se rasant* et *en chantant* circonstanciel de manière pour *se raser* dans *Paul se rase en chantant*, c'est parce que dans la combinaison des deux, *se raser* est conçu a priori, comme étant l'activité dominante ou principale et *chanter* comme l'activité secondaire, qui entre dans le cadre des activités pouvant apparaître comme faisant partie des attitudes ou du comportement de quelqu'un qui se rase.

(Kleiber 2008 : 119)

私は別の論文で、「ポールは髭を剃るとき歌を歌う」について、(ジェロンディフが時の解釈を受ける) 原因は既知や言語外的な予測可能性ではないことを示した。原因は同じ一つの主語について、「歌う」と「髭を剃る」というふたつの述語が同時に使われるときのアプリアリの非対称性にある。「ポールは髭を剃るとき歌を歌う」で「髭を剃るとき」が「歌う」にたいして時に定位点になり、「ポールは歌を歌いながら髭を剃る」で「歌を歌いながら」が「髭を剃る」についての様態の状況補語となるのは次の理由による。二つの行為の組み合わせにおいて、「髭を剃る」はアプリアリに主要な支配的行為と見なされ、「歌を歌う」は副次的行為

と見なされるためである。「歌を歌う」は髭を剃る人がそれと同時にやることのある行為のリストにある一つにすぎない。

(6) Kleiber はふたつの事行の非対称性を次のように定式化している。

Si une activité W est une manière possible d'une activité Z, alors W au gérondif ne peut être repère temporel pour Z, comme Z au gérondif peut l'être pour W.

(Kleiber, Georges, « En passant par le gérondif avec mes (gros) sabots », *Cahiers Chronos* 19, 2007)

事行 W が事行 Z の可能なひとつの様態であるとき、Z のジェロンディフは W の時の定位点になれるが、W のジェロンディフは Z の時の定位点になれない。

【解説】

いま、W=*chantonner* 「鼻歌を歌う」、Z=*préparer le dîner* 「夕食を作る」だとして。 「鼻歌を歌う」は「夕食を作る」という行為のひとつの可能な様態である。このとき *préparer le dîner* のジェロンディフは *chantonner* の時の定位点となることができる。

i) *En préparant le dîner, elle chantonne.* 夕食の仕度をする時、彼女は鼻歌を歌う。その逆は時の定位点ではなく、様態の状況補語になる。

ii) *En chantonnant, elle prépare le dîner.* 彼女は鼻歌を歌いながら夕食の仕度をする。つまり Kleiber は、「主要な事行は副次的な事行の定位点となることができるが、副次的な事行は主要な事項の定位点となることができない」と言っているのである。

Gettrup の言うこととちがっていることに注意しよう。

iii) *Je chante en me rasant.* 私は髭を剃る時、歌を歌う。

iv) *Je me rase en chantant.* 私は歌を歌いながら髭を剃る。

Gettrup は、iii) で *en me rasant* が時の定位点となるのは、「髭を剃る」という行為は男性なら毎日のようにやる行為で、新規性が低く情報価値が少ないからだとしていた。これは主要な事項が定位点になるという Kleiber の主張とは逆方向だと言ってよい。

(7) Antéposés, les gérondifs ont tendance à avoir partie liée avec l'amont. (...) le gérondif en construction détachée antéposée est d'une certaine manière partiellement autonome pour ce qui est du procès dénoté et c'est cette autonomie qui demande à être justifié (...) Cette justification peut l'être de différentes manières. Le point important est que, lorsqu'il s'agit d'un procès spécifique, c'est généralement le contexte antérieur qui prépare ou amorce le gérondif antéposé. (...)

Son aiguille est tombée par terre, et, *en tombant*, elle lui a éraflé la jambe.

(Kleiber 2008 : 122)

前置されたジェロンディフは上流とつながりを持つ傾向がある。(…)前置された遊離構文のジェロンディフは、それが表す事行の点で、ある意味(主節からの)部分的な自立性を持つ。この自立性は説明を要するものである。(…)この説明はいくつかのやり方でできる。重要な点は、特定の事行を表すとき、前置されたジェロンディフを準備し呼び水となるのは、たいていの場合、先行文脈だということである。

彼女の針は地面に落ちた。そして落ちるときに、彼女の脚を傷付けた。

【解説】

Kleiber は、ジェロンディフが動詞の照応形であることは否定するが、ジェロンディ

フが表す事行が、先行文脈に既に含まれていたり、先行文脈からたやすく引き出すことができると考えているようだ。はっきりと述べているわけではないが、大筋は Gettrup や Herslund が言うように、前置ジェロンディフが既知情報・予測可能な情報を表すと認めているようである。

(8) Le Draoulec (1999) はジェロンディフではなく、時の従属節の研究である。しかしその論考はジェロンディフを考察するためにも有用なので、少し見ておこう。

Le Draoulec (1999) は冒頭、時の従属節は前提であると広く認められていると書き始めている。

Il est commun de voir mentionner le caractère présuppositionnel des subordonnées temporelles. (Le Draoulec 1999 : 97)

時の従属節が前提の性質を持っていると言われるのはよくあることである。

時の従属節が前提であることは、次の例のように否定の作用域に入らないことによって示すことができるとする。

a. Après que le Schleswig-Holstein eut été enlevé au Danemark, la Prusse et l’Autriche se brouillèrent.

シュレスウィック・ホルスタインがデンマークで誘拐された後、プロセインとオーストリアの関係は悪化した。

b. Il n’est pas vrai qu’après que le Schleswig-Holstein eut été enlevé au Danemark, la Prusse et l’Autriche se brouillèrent.

シュレスウィック・ホルスタインがデンマークで誘拐された後、プロセインとオーストリアの関係が悪化したというのは事実ではない。

この例が示すように主節を否定しても従属節の真偽値は変わらない。しかし Le Draoulec (1999) は、このような論理的なアプローチでは従属節の問題はうまく扱えないと考える。それに代わって語用論的・談話的 (pragmatique-discursif) なアプローチが必要だとしている。

(9) Le Draoulec (1999)は、Molendijk, A., « On *quand*-clauses », M. Kas et als. (eds) *Language and Cognition I*, Groningen, 1991. の論考から出発する。Molendijkによれば、次の例文は日常会話では、話し手の奥さんがロンドンに行ったことを Marc が知らないと思いと使いにくいという。

(3) Ecoute, Marc, quand ma femme est partie hier pour Londres, elle a oublié de...

ねえ、マルク。昨日うちの家内がロンドンに出かけて行く時、彼女が (...) するのを忘れたんだよ。

その場合は次のように言う方が自然であるとする。

(4) Ecoute, Marc, ma femme est partie hier pour Londres. Elle...

ねえ、マルク。昨日うちの家内がロンドンに出かけて行ったんだ。彼女は (...)

Molendijk は次のように述べている。(Molendijk 1991 : 245)

Le fait qu’exprime la subordonnée en *quand* fait déjà partie (ou du moins, est considéré par le locuteur comme faisant partie) de ce qui est connu de l’interlocuteur. *quand* 節の述べる内容は、聞き手にとって既知であるか、少なくとも聞き手にとって既

知だと話し手が判断することがらである。

また次のように常識によって予測できることがらも *quand* 節に生じることが出来る。誰にも子供時代があることは常識の一部だからである。

(5) *Quand j'étais petit, je...*

私が子供だった頃、私は (…)

また Molendijk は次のような例は反例とはならないとする。

(6) *Quand je travaillais à l'Université de Cambridge, les conditions étaient plus favorables encore.*

私がケンブリッジ大学に勤めていた時は、待遇はさらに良かったよ。

話し手 A と聞き手 B はともに大学教員だとする。B は A がケンブリッジ大学に勤めていたことを知らなくても、(6) は不自然ではない。Molendijk はこのような場合には、Lewis (1979) の言う *accommodation* 「調整」が行われ、B の前提集合がアップデートされて、A がケンブリッジ大学に勤めていたことを、あたかも B が知っていたように扱われるとする。

cf. Lewis, David, "Scorekeeping in a language game", R. Bauerle et als. (eds) *Semantics from Different Points of View*, Springer Verlag, 1979.

(10) Le Draoulec (1999) は Molendijk の考え方を批判して、*quand* 節の内容は聞き手にとって既知でなくてはならないという制約は強すぎるとする。それに代わって提案されるのは、先行文脈とのつながりである。

La relation privilégiée des présupposition au contexte est (...) une relation de Background (« arrière-plan »). (...) L'établissement d'une relation d'arrière-plan ne signifie cependant pas qu'o en revienne à l'ancienne conception des conditions de connaissance préalable. Ces conditions étaient très restrictives, alors que la possibilité de lier la présupposition à un élément du contexte doit être comprise en un sens large. Il suffit ainsi, pour ouvrir la possibilité d'une liaison anaphorique, que le degré de généralité atteint dans la subordonnée soit suffisamment élevé. Considérons les exemples suivants :

(11) *Quand je fumais, j'avais tout le temps mal à la gorge.*

(12) *Quand j'étais mince, j'aimais mettre cette robe.*

Beaucoup d'individus ont fumé, ont été minces à une période de leur vie. Sans avoir la force d'évidence associée à *quand j'étais petit, quand je fumais* ou *quand j'étais mince* invitent à des inférences trop communes pour ne pouvoir être regardées comme partie du contexte. (Le Draoulec 1999 : 102)

前提と文脈との間に成り立つ特別な関係は、「背景」という関係である。(…)しかしながら背景関係の確立は、既知情報でなくてはならないとする昔の考え方に立ち戻ることを意味しない。既知情報でなくてはならないという条件はきわめて強い制約である。一方、前提を文脈中の要素と結びつけるということは、広い意味で理解しなくてはならない。先行文脈への照応という可能性を開くためには、従属節の述べている内容が十分に受け入れられるものであるだけでよいのである。次の例を見てみよう。

(11) 私が煙草を吸っていた頃、私はいつも喉が痛かった。

(12) 私が今より痩せていた頃は、このドレスを着るのが好きだった。

人生の一時期に、煙草を吸っていた人や、今より痩せていた人はたくさんいる。「私が子供だった頃」というほど自明さは強くはないものの、「私が煙草を吸っていた頃」や「私が痩せていた頃」は、誰の頭にも浮かぶような推論を引き出すので、たやすく文脈の一部と見なされるのである。

【解説】

Molendijk は *quand* 節の内容は聞き手にとって既知でなくてはならないとしたが、Le Draoulec はその条件は強すぎると考える。Le Draoulec は条件をもっと緩めて、*quand* 節の内容が、話し手と聞き手の発話の場において、背景情報となりうるものであれば許容されるとする。Molendijk が挙げた次の例でも、必ずしも調整 (*accommodation*) という語用論的操作が必要ではなく、話し手と聞き手が両方とも大学教員で、教員の待遇について話しているという文脈があれば、話し手が以前にケンブリッジ大学に勤めていたことを聞き手が知らなくても自然な発話になるとする。

- i) *Quand je travaillais à l'Université de Cambridge, les conditions étaient plus favorables encore.*

私がケンブリッジ大学に勤めていた時は、待遇はさらに良かったよ。

(11) 以上は話し手と聞き手がいる会話についてだが、語りにおいてはさらに自由度が増すと Le Draoulec は言う。

On peut se douter que dans une narration, l'exigence d'attendu ne vaut pas davantage que ne valait l'exigence de connu dans les exemples examinés ci-dessus. De fait, il me semble que la liberté du narrateur est bien plus grande qu'il n'est reconnu par Molendijk. Le narrateur hiérarchise, ordonne les uns par rapport aux autres des événements dont il a la maîtrise, sans nécessairement prendre en compte, ni les connaissances, ni les attentes « légitimes » du lecteur.
(Le Draoulec 1999 : 106)

上に見た例では [*quand* 節が] 既知のことがらを表す必要はなかったが、語りにおいても同様に [*quand* 節が] 読者の期待に応えなくてはならないという必要性はないことが十分に推測できる。事実、語り手の自由はモーレンディークが考えた以上に大きいと思われる。語り手は自らが語る出来事を支配しており、それらを階層化し互いに順序づける。その際に、読者が何を知っているかとか、何を当然なものとして期待しているかなどということは、必ずしも考慮する必要はないのである。

(12) Molendijk は (7) では、先行文脈の「歩き始めた」から *quand* 節の内容の「森に着いた」は引き出すことができ、読者の期待に合致している。しかし、(8) では「歩き始めた」から「転んだ」は引き出すことができず、読者の期待に反しているため容認されなかったとした。

- (7) *Marc (se leva et) se remit en marche. Quand, après deux heures de marche, il atteignit une forêt, (il...)*

マルクは（起き上がり）また歩き始めた。2時間歩いて森に着いた時、（彼は…）

- (8) *Marc (se leva et) se remit en marche. *Quand il tomba, (il...)*

マルクは（起き上がり）また歩き始めた。転んだ時、（彼は…）

Le Draoulec は例文を次のように変えれば十分に容認可能だとする。

- (23) *Marc se leva et se remit en marche. Quand, après deux heures de marche épuisante,*

il tomba, il tenta d'appeler à l'aide.

マルクは起き上がり、また歩き始めた。疲れる道を 2 時間歩いて転んだ時、彼は助けを呼ぼうとした。

また小説の冒頭で、次のように読者の期待にまったく含まれないことが述べられることも少なくない。

(24) Lorsque Irène, sortant de l'appartement de son amant, descendit l'escalier, de nouveau une peur subite et irraisonnée s'empara d'elle. (Stefan Zweig, *La Peur*)

イレーヌが恋人のアパルトマンを出て階段を降りた時、突然訪れた理由のない恐怖が再び彼女を捉えた。

(13) Nous nous contenterons de souligner que les contraintes pesant sur l'utilisation des subordonnées temporelles sont très souples ; beaucoup plus souples, en tout cas, que ne le suggère la conception pragmatique classique de la présupposition. Les conditions de connaissance préalable qu'on invoque ordinairement, même affaiblies en conditions d'attente, ne sont pas impératives : toute situation, aussi nouvelle, aussi inattendue soit-elle, peut de fait être introduite dans une subordonnée temporelle. (Le Draoulec 1999 : 109)

ここでは次の点を強調するに留めておこう。時の従属節を使うときの制約はきわめて柔軟である。いずれにしても、前提の古典的で語用論的な考え方を取る人がよく言うよりも、はるかに柔軟なものである。聞き手があらかじめ知っていなくてはならないとするよく持ち出される条件は、たとえ期待できる範囲に収まっていないとすることはできないという形に弱めたとしても、そんなに強いものではない。どんなに新しく、どんなに意外な状況でも、実際に時の従属節の中に現れることができるのである。

(14) まとめ

時の従属節について言われていることは、そのまま時を表すジェロンディフにも応用することができる。確かに文頭に遊離され、主節にたいして時の定位点を表すジェロンディフは、Kleiber の言うように先行文脈とのつながりが強く、先行文脈にすでにある要素や、先行文脈から推論できる要素を含むことが多いのは事実である。しかしそれは談話の一貫性 (cohérence) というより大きな談話原則の一部であり、「時のジェロンディフは既知情報でなくてはならない」というような強い制約ではないと考えるべきだろう。

3.6. 春木 (1992)

(1) 春木は、ジェロンディフは二つの事行を密接に関連づけるとする。

(9) Il voyageait en prenant des photos.

(10) Il voyageait, prenant des photos.

(9)は「彼は写真を撮るために旅行をしていた」、(10)は「彼は旅行をしながら写真を撮った」とでもなるだろう。つまり、(10)においては旅行をするという行為と写真を撮るといふ行為が、いわばたまたま並行していたことを表しているだけなのにたいして、(9)の文では、EN が存在することにより二つの行為の間により密接な関係が打ち立てられているのである。言い換えれば、voyager という事行が、prendre des photos という事行の中に位置づけられている localisé のである。 (春木 1992 : 14)

(太字強調は原文のまま)

【疑問点】

春木はジェロンディフが前置された場合と後置された場合とを区別せずまとめて論じている。(9) (10) は後置のケースである。(9) の *en prenant des photos* は様態を表す状況補語の機能を持っており、その意味で主節動詞 *voyageait* の支配下にあるため、動詞との関係は密接である。一方、(10) の *prenant des photos* は主節の主語の間接属詞で同格であり、その意味で (9) より繋がりが密接でないと言うことはできる。しかし、*voyager* という事行が *en* の働きによって *prendre des photos* という事行の中に位置づけられるというのはおかしい。また (9) を「彼は写真を撮るために旅行をしていた」と訳すのは妥当とは言えない。

(2) 春木はジェロンディフの中には主節動詞の内容を敷衍するタイプがあるとする。

(11) *Les enfants jouaient dans la cour, lançant la balle, sautant à la corde.*

子供たちはボール投げをしたり縄跳びをして校庭で遊んでいた。

(12) *Je la suivais, montant rapidement l'escalier de bois qui conduisait à la chambre.*

私は寝室に続く木の階段を駆け上がって彼女の後を追った。

(日本語訳は東郷による)

ジェロンディフに書き換えると、前置でも後置でも容認度が低いとしている。(後置の例は挙げられていない)

(13) *?En lançant la balle et en sautant à la corde, les enfants jouaient dans la cour.*

(14) *?En montant rapidement l'escalier de bois, je la suivais.*

【考察】

(11) (12) の敷衍型の分詞節は、主節の表す事行をより細かく述べる(詳述 *spécifier*) 働きがある。「ボール投げや縄跳びをする」は「遊ぶ」の内容をより細かく述べたもので、「木の階段を駆け上がる」は「彼女の後を追う」やり方を具体的に述べたものである。このとき主節動詞と分詞節は一つの事行を表し、意味的な一体性が強い。

一方、ジェロンディフは主節とは異なる事行を表す。次の例では「働き過ぎる」と「健康を損なう」は別の出来事であり、だからこそ前者は後者の原因と解釈される。

En travaillant trop, il s'est ruiné la santé. [作例]

働き過ぎて、彼は健康を損なった。

このために、(13) (14) のようにジェロンディフにすると、「ボール投げや縄跳びをする」と「遊ぶ」とが別の異なる事行であるかのようにになってしまうので、容認度が低くなると考えられる。

(3) ジェロンディフが前置されて時の定位点を表す用法では *avoir, pouvoir* を用いることができないというロベルジェ、Cl. & G. メランベルジェ『現代フランス前置詞活用辞典』(大修館、1983) の記述を引いている。

a. *Beaucoup de femmes quittent leur emploi { *en ayant des enfants / quand elles ont des enfants }.* 多くの女性は子供ができると勤めをやめる。

主節の動詞が *être, rester* のとき、付帯する動作をジェロンディフで表すことができないという同辞典の記述も引く。

b. *Elle restait à la maison { *en lisant des livres / à lire des livres. }*

彼女は家にいてずっと本を読んでいた。

春木はその理由を、意味内容の乏しい動詞に付帯状況を付けることがおかしいから
だと言う。ただし容認される例もあるとして次の例を挙げている。

c. Elle restait à la maison *en s'exerçant* à la flûte.

彼女はずっと家にいてフルートの練習をしていた。

(4) 春木はまた、分詞節では複合形を用いなくとも、二つの継起的な事行を表すこと
ができると指摘している。

(24) Le professeur, *ouvrant* le livre, commença à nous réciter un poème.

先生は本を開くと、(その本の中の) 詩を読み始めた。

ところがジェロンディフを用いると、二つの事行が同時に起きると解釈することも
でき、また先生が読む詩は開いた本の中になくという解釈も可能だとする。

(25) Le professeur, *en ouvrant* le livre, commença à nous réciter un poème.

先生は本を開きながら、(たまたま覚えていた) 詩を暗唱し始めた / (その本の中の)
詩を読み始めた。

【考察】

春木は (24) と (25) の意味のちがいを指摘するに留まり、説明していない。このち
がいは後で取り上げる Herslund (2000) の分析によって説明することができる。少し
先取りすることになるが、かんたんに言うと次のようになる。

① Gettrup も強調していたように、ジェロンディフの表す事行と主節の表す事行は、
部分的にでも同時性がなくてはならない。同時ということは、二つの事行は別々
の出来事ということである。

② 分詞節は主節と一体となって、主節の表す事行の一段階や一局面を表したり、
切れ目なく継起する事行を表す。

(5) 春木は、原因・理由を表す分詞節にはなんら制約がないのにたして、ジェロンデ
ィフには *avoir, être, pouvoir* は使えないという制約があることに触れている。

(29) **En étant* malade, il n'a pas pu assister à la réunion.

病気なので彼は会合に出られない。

(30) **En ayant* beaucoup de lettres à répondre, je ne peux pas lui écrire tout de suite.

返事を書かなくてはならない手紙がたくさんあるので、彼(女)にすぐに手紙を書
けない。

(31) **En étant* enfant, elle ne comprend pas ces choses-là.

子供なので彼女はそういったことがわからない。

(32) **En ayant* déjà tant de choses à faire, je ne peux pas faire cela en plus.

することがたくさんあるので、加えてそれをすることはできない。

春木は、「原因」は分詞節が表すという Togeby と Le Bidois & Le Bidois の見解に触
れるに留まり、なぜ *avoir, être, pouvoir* のジェロンディフが原因・理由を表せないかを
説明していない。

春木は触れていないが、Franckel (1989) には、前置ジェロンディフで *être, avoir* は
使いにくいという指摘がある。(例文番号は原文のまま)

(15) ??*En ayant beaucoup de courage, il est sorti.*

とても勇気があったので、彼は外に出た。

(16) ?*En ayant beaucoup d'argent, on se crée beaucoup de faux amis.*

たくさんお金を持っていると、友人面して寄って来る人が増える。

(17) ?*En étant désagréable avec tout le monde, il s'est isolé.*

みんなに意地悪な態度を取ったので、彼は孤立した。

Franckel はその理由を、*être, avoir* は稠密な状態動詞で、どの部分を取っても同じであるために、主節を定位する特定の出来事を表すことができないためだとしている。

N.B. ただし離散的な動詞でなくては定位点になることができないというのは、前置ジェロンディフが時の定位点になる場合である。(15)~(14) は時ではなく原因・理由を表すジェロンディフであり、Franckel の説明は的外れである。

(6) 最後に春木は、ジェロンディフには「手段」の意味があるが、分詞節にはないことを指摘している。

(39) *En enseignant l'anglais, il gagne sa vie.*

彼は英語を教えて生計を立てている。

(40) **Enseignant l'anglais, il gagne sa vie.*

(41) *On s'instruit en lisant.*

読書によって人はいろいろなことを学ぶ。

(42) **On s'instruit lisant.*

3.7. Kindt (1999)

(1) Kindt は、*en colère* のように名詞に付く場合と同じく、ジェロンディフにおいても前置詞 *en* は「容器」を表すとする。

En accorde à l'action dénotée par le groupe verbal sous-catégorisé, la fonction de contenant. Le contenu est alors l'action dénotée par le groupe verbal de la principale. Le contenant verbal possède des confins temporels. Le champ temporel recouvert par 'en+GV (=groupe verbal)' est au moins identique au champ recouvert par P (=principale) ou peut être plus grand. Tout comme une bouteille limite la quantité d'eau qui peut y être comprise, 'en+GV', par la préposition *en*, constitue un cadre limitatif / restrictif pour P. (Kindt 1999 : 114)

前置詞 *en* は、選択される動詞句の表す動作に容器の機能を与える。容器の中身は主節の動詞句が表す動作である。動詞句の容器には時間的な境界線がある。「*en*+動詞句」がカバーする時間の範囲は、主節がカバーする範囲と少なくとも同じであるか、それより広い。瓶によって中に入れられる水の量が制限されるように、「*en*+動詞句」は前置詞 *en* の働きによって、主節にたいして制限をかける枠となる。

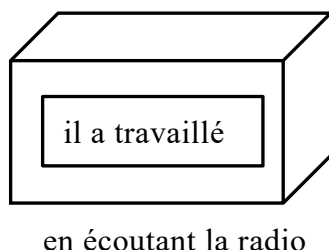
【解説】

être en colère が「怒りという状態の中にいる」ことを表すように、Kindt は前置詞 *en* のプロトタイプの意味は「容器」だとする。ジェロンディフの場合も同じである。

i) *Il a travaillé en écoutant la radio.* [作例]

彼はラジオを聴きながら勉強した。

この例を使って説明すると、次のようなイメージになるだろう。



外側の箱がジェロンディフ *en écoutant la radio* を表す。主節の *il a travaillé* が継続する時間幅は、ジェロンディフの表す時間幅の中にすっぽりと収まる。つまり i) では、彼が勉強していた間、ずっとラジオを聴いていたことになる。

(2) Kindt は次の 2 つの例を図示している。(例文番号は原文のまま)

(17) *En postant la lettre maintenant, tu atteindras le directeur à temps.*

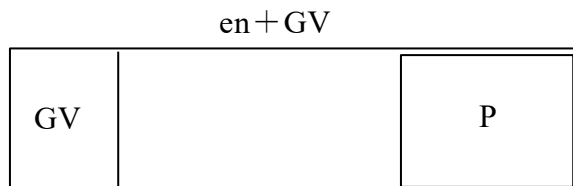
今手紙を出したら、部長（所長）に間に合うように届くだろう。

T (GV) : poster la lettre

動詞句が表す時間：手紙を出す

T (en + GV) : poster la lettre + la situation qui en résulte

en + 動詞句 [=ジェロンディフ] が表す時間：手紙を出す + その結果起きる事態



【解説】

(17) は条件を表すジェロンディフである。図の四角はそれぞれの事行が継続する時間幅を表している。GV は「手紙を出す」のに要する時間、P は「部長に手紙が届く」時間で、両者が離れているのは手紙を出してから届くまでに時間がかかるからだろう。問題は長四角全体がジェロンディフの表す時間幅だとしていることである。おそらく Kindt は *tu atteindras le directeur à temps* という主節の表す事行の生起が、*en postant la lettre maintenant* [=si tu postes la lettre maintenant] という条件の支配下にあると言いたいのだろう。しかしそれは条件とその帰結という論理的関係の話である。*en postant la lettre maintenant* というジェロンディフ固有の時間幅が、「部長に手紙が届く」という事態までその中に含んでいるとは考えにくい。

(18) *Il travaille en chantant.*

彼は歌いながら仕事をしている。

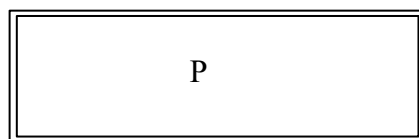
T(GV) : chanter

動詞句が表す時間：歌う

T(en + GV) : chanter

en + 動詞句が表す時間 : 歌う

$$T(\text{en} + \text{GV}) = T(\text{GV})$$



【解説】

(18)は同時性を表すジェロンディフである。この場合 *il travaille* と *en chantant* は時間幅が一致するので問題ない。

(3) 問題点

Kindt が挙げているのは (17) の条件と(18)の同時性の例だけで、他の用法のジェロンディフはどう図示するのか不明である。次は Gettrup (1977) の例である。

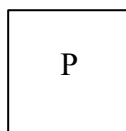
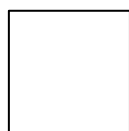
a. *En apprenant ces nouvelles, il décida de convoquer ses barons.*

この知らせを聞くと、彼は臣下の貴族たちを召集することを決めた。

b. *En atteignant la promenade du bord de mer, ils hésitèrent, faillirent continuer chacun de son côté.* 海沿いの遊歩道に達したとき、彼らはどうするか迷い、あやうくめいめいが別の方向に進むところだった。

Gettrup はこの例では、ジェロンディフの事行と主節の事行の間にはまったく重なりがないとする。a.では知らせを聞いてから召集することを決めたのであり、b.では海辺に達してからどうしようか迷ったのである。a.は *Ayant appris...* に、b.は *Ayant atteint...* に書き換えることができる。もしそうだとすると図示は次のようになり、ジェロンディフは容器として働かないことになる。

$$T(\text{GV}) = T(\text{en} + \text{GV})$$



このように Kindt の「ジェロンディフ=容器説」は明らかに不十分である。

3.8. Herslund (2000)

ジェロンディフと分詞節の違いを幅広く論じており、この問題についての最も重要な文献のひとつである。Herslund は Gettrup (1977) の分析を引き継いでいて、それより明確な仮説を出している。タイトルの *co-verbe* とは、ネパール語やオセアニア諸語に見られる *serial verb* 「連続動詞」を指す用語である。2つの動詞が連続して用いられ、ひとつの出来事を表す現象を言う。日本語の「盗み取る」「貼り付ける」のような複合動詞と少し似ている。Herslund は、現在分詞は主節の動詞と一体となってひとつの事行を表すということが言いたいのである。

(1) Herslund も、分詞節とジェロンディフは入れ替え可能だとする伝統文法の見解に

反対し、両者ははっきり異なるとする。

a. *Entrant dans Grandson, ils découvrent les pendus du mercredi des Cendres.*

グランドソンの中に入って、彼らは灰の水曜日の首つり死体を発見する。

b. *En s'enfuyant de Grandson, Charles s'arrête quelques instants à Jougne.*

グランドソンから逃げ出した時、シャルルは少しの間ジューニュに立ち寄った。

La différence entre les deux formes consiste surtout en ceci que le gérondif constitue un repère temporel par rapport au verbe principal — et pour parler de repère temporel, il faut démontrer que la forme en question sert à « situer le verbe principal dans le temps » (Gettrup 1977 : 217) — alors que le PP [=participe présent], lui, dénote toujours ou bien une situation qui se prolonge imperceptiblement dans une autre, ou bien carrément une phase ou un aspect particulier de la situation dénotée par le verbe principal ; mais il ne sert jamais à situer le verbe principal. Autrement dit, le gérondif désigne une situation autonome concomitante à la situation désignée par le verbe principal, alors que le PP désigne avec son verbe principal une seule situation. (Herslund 2000 : 87)

二つの形式のちがいはとりわけ次の点にある。ジェロンディフは主節動詞にたいして時間的な基準点の役割を果たす。もちろん時間的な基準点というからには、ジェロンディフが「主節動詞を時間軸上に定位する」(Gettrup 1977 : 217)ことを示さなくてはならない。一方、現在分詞は、もう一つの状況へとただらかに続く状況を表したり、もっとはつきり主節が表す状況の一段階や、特定の局面を表したりするのである。現在分詞は主節の動詞を定位することは決してない。言い換えれば、ジェロンディフが表すのは、主節動詞が表す状況と同時だが独立した状況であり、現在分詞は主節動詞と一体となって一つの状況を表すのである。

【解説】

Herslund は現在分詞とジェロンディフは二つの点において異なるとしている。

① 主節動詞の事行を時間軸上に定位する基準点となるかどうか。

→ ジェロンディフは基準点となるが、現在分詞はなれない。

② 主節動詞の事行と独立した事行を表すかどうか。

→ ジェロンディフは独立の事行を表すが、現在分詞は主節と一体となってひとつの事行を表す。

このことを次の例をもとにして考えてみよう。

i) *En sortant du cinéma, Jean est tombé sur un vieil ami.* (作例)

映画館から出るときに、ジャンは旧友とばったり出くわした。

ジェロンディフは主節が表す事行「ジャンが旧友とばったり出くわす」が「いつ起きたか」を表しており、*Quand il est sorti du cinéma...*のように *quand* 節で書き換えることができる。このようにジェロンディフは、主節動詞が表す事行を時間軸上に定位する基準点になる。基準点というのは船を係留する杭のようなもので、先に杭があって、後から船が係留される。このためジェロンディフは主節に前置されることが多い。

基準点となるということは、ジェロンディフの表す事行と主節が表す事行は、独立した別の出来事だということになる。さもないと時間軸上に定位する基準点となることはできない。

一方、分詞節はちがうことを、Herslund は次の例文を用いて説明している。

(12) a. La sultane s'est levée *mettant fin à l'entretien*.

サルタンは立ち上がり謁見を終えた。

b. La sultane a mis fin à l'entretien *en se levant*.

サルタンは立ち上がることで謁見を終えた。

a. Il s'était levé, *s'appuyant sur sa canne*.

彼は杖にすがって立ち上がった。

b. Il s'était appuyé sur sa canne *en se levant*.

彼は立ち上がる時杖にすがった。

現在分詞を使った (12 a) では、「立ち上がる」ことイコール「謁見を終える」ことで両者は一体である。二つの事行を表しているのではなく一つの事行であり、「立ち上がる」という行為が「謁見を終える」ことの合図となっている。ほぼ同じ意味を (12 b) のようにジェロンディフを用いて表すことができるが、両者は別の出来事である。*en se levant* は「立ち上がることによって」という手段の意味になり、主節に従属する。

二つ目の (12 a) でも「杖にすがると」「立ち上がる」は一つの事態で、「杖にすがると」は「立ち上がる」という行為の一つの側面となっている。一方、二つ目の (12 b) の *en se levant* は時の解釈になって、主節とジェロンディフは別々の出来事を表している。

(2) Cette différence, dont l'explication proposée est que le gérondif dénote une situation autonome, concomitante à la situation désignée par le verbe principal, alors que le PP dénote toujours avec son verbe principal une seule situation, est mise en relief par le contraste suivant entre les deux formes :

(7) a. « Je commence à connaître les plantes de la taïga par cœur », dit Albertine, *en versant* de cette soupe dans leurs assiettes.

b. — Agha, dit-elle enfin, *émergeant* de son long silence.

Si dans a., on a la description d'une personne qui fait deux choses en même temps (*dit — pendant qu'elle versait...*) , on décrit dans b. deux facettes de la même situation, dans la mesure où *émergeant* ne fait que décrire *dit* d'une autre façon. (Herslund 2000 : 88)

このちがいは、ジェロンディフは主節の表す事行と同時ではあるが独立した事行を表すのにたいして、現在分詞は主節動詞とともに一つの事行を表すという仮説で説明することができる。このちがいは次の例によく現れている。

(7) a. 「私はタイガ (=シベリアの亜寒帯林) の植物の名前をそらで言えるようになりました」とアルベルティーンはスープを皿に注ぎながら言った。

b. 「アガ (=オスマントルコの宮廷武官)」と彼女はとうとう深い沈黙を破って言った。

a. では、ふたつの動作を同時にしている人が描写されている(言う—注ぎながら)のに対して、b. は同じ一つの事態の二つの側面を表している。「沈黙を破る」は「言う」を言い換えているにすぎないからである。

(3) Herslund は分詞節が主節と一体となってひとつの事行を表すことは、副詞 *ainsi* の用法によって示すことができるという。

(11) Avec lui, on passe de la démocratie parlementaire à ce que certains ont appelé « la démocratie autoritaire », *ouvrant ainsi* la voie au national-socialisme.

彼によって、議会制民主主義から「権威的民主主義」と呼ばれることもある政体へと移行し、こうして国家社会主義への道が開かれたのである。

Ce sont des cipayes de l'armée des Indes, descendants de ceux qui, en 1857, se révoltèrent ici même, à Lucknow et massacrèrent la garnison anglaise, *donnant ainsi* le signal de combats qui embrassent tout le nord du pays.

彼らはインド軍のセポイ (=イギリス軍のインド人兵士) である。彼らは 1857 年にまさにここラックナウで叛乱を起こしてイギリスの守備隊を虐殺し、インド北部全体に広がる戦闘の口火を切った兵士たちの子孫であった。

Celui-ci (=l'adverbe *ainsi*) relie les deux prédications en signalant que le co-verbe constitue un développement ou un étoffement du verbe principal, et que c'est en fait le PP qui apporte l'information essentielle. (Herslund 2000 : 90)

副詞 *ainsi* は、ふたつの叙述を結びつけて、連続動詞 (=分詞節) が主節が述べることの展開や肉付けを表すことを示している。同時に重要な情報を表すのが分詞節であることを示す。

【解説】

Herslund の言うように、ジェロンディフは主節とは別の事行を表すが、分詞節は主節と一体となって一つの事行を表すと考えると、いくつかの現象を説明できる。

一つは後置された分詞節には主節の内容を敷衍する用法があるという事実である。

(11) Les enfants jouaient dans la cour, *lançant* la balle, *sautant* à la corde. (春木 1992)

子供たちはボール投げをしたり縄跳びをして校庭で遊んでいた。

「遊んでいた」と、「ボール投げをしていた」「縄跳びをしていた」は別の出来事ではない。ボール投げや縄跳びは「遊ぶ」の内容であり、両者は一体である。これをジェロンディフにすると容認度が下がるのは、まるで別の事行のようになってしまうからだと考えられる。

もう一つは分詞節にはジェロンディフにはない結果用法があることである。

L'avion a explosé en air, *faisant* 87 morts. (作例)

飛行機は空中で爆発し、87名の死者を出した。

ここでも「爆発する」と「87人の死者を出す」は別の出来事ではない。「87人の死者を出す」は飛行機事故のひとつの側面である。

(4) Herslund は分詞節が主節にたいして前置された場合と後置された場合を細かく分析している。

① 前置された現在分詞は、主節の表す事行の最初の段階か、主節の事行を引き起こした原因を表す。

(13) *Mettant en avant l'impératif national, invitant* les peuples à disposer d'eux-mêmes, l'idéal révolutionnaire touche profondément l'intelligentsia allemande.

国家の要請を前面に押し出し、諸国民の自決をうながしたために、革命の理想はドイツの知識階級の心を深く捉えた。

Entrant dans Grandson, ils découvrent les pendus du mercredi des Cendres.

グランドソンの中に入って彼らは灰の水曜日の首つり死体を発見する。

Se recroquevillant dans son lit, elle s'était remise à sangloter.

ベッドの中に潜り込んで、彼女はまたすすり泣き始めていた。

Puisant à pleines mains, la grande trésorerie les (=des piécettes d'or) lance vers l'orchestre.

両手ですくって宝物庫係はそれ（金の硬貨）をオーケストラのほうに投げる。

② 後置された分詞節は、主節が表す事行をさらに敷衍したり、展開したりする。いくつかのケースがあり、次は主節の事行の一側面、一局面を表す場合である。

(15) Il s'était tassé, **s'enfonçant dans le fauteuil**.

彼は肘掛け椅子に沈み込んで背を丸めた。

Dicboit s'était levé, penché sur la table, **s'y appuyant à deux mains**

ディクボワはテーブルに身をかがめ両手を突いて立ち上がっていた。

Faute de crédits, les investissements cessent et la production chute, **accentuant encore le chômage**.

予算不足のために投資はなくなり、生産は低下して、さらに失業が増加する。

分詞節は主節の事行の最終段階を表すこともあり、結果の意味となる。

(16) Le 12 mai, les Germano-Italiens se rendent au cap Bon, **laissant aux Alliés un bon nombre de « Tigre »**.

5月12日にドイツ軍とイタリア軍はボン岬で投降し、連合国にたくさんのタイガー戦車を残した。

il avait renversé des sacs d'arachides, fait rouler des fûts vides qui s'en allaient heurter des piles de planches, **les déséquilibrant**.

彼は落花生の袋をひっくり返し、空の樽をころがした。樽は積んであった板の山にぶつかって、板の山はぐらついた。

③ 前置と後置が両方ある例もある。また後置分詞節をいくつも連ねることもある。

(18) **S'estimant injustement insulté et trahi**, il observa dès lors envers les dirigeants communautaires une attitude méfiante et dédaigneuse, **leur reprochant d'être inattentifs aux évolutions géopolitiques en cours**.

不当に侮辱され裏切られたと感じて、彼はそれ以後、ヨーロッパ共同体の指導者たちにたいして、用心深く軽蔑的な態度を取り、彼らは進行中の地政学的変化に気づいていないと非難した。

(19) et il les aurait rejoints, **effaçant en quelques enjambées le temps écoulé, franchissant les fosses qui les séparaient désormais**

数歩で跨ぎ越して過ぎ去った時をなかったことにし、それ以後彼らを隔てている溝を跳び越して、彼は彼らと再び会うだろうに。

(20) Chaque jour, je suis descendu au cellier, y **passant plusieurs heures, mettant de l'ordre dans mes notes**.

毎日私は地下貯蔵室に降りて行き、そこで何時間も過ごし、メモを整理した。

(5) ジェロンディフと分詞節のちがい（まとめ）

Si le gérondif dénote la simultanéité d'une situation avec une autre, le PP, lui, dénote qu'une situation se prolonge imperceptiblement dans une autre, sans solution de continuité. (...) Par

conséquent, si le PP marque ainsi que deux situations se compètent ou se confondent en quelque sorte, le gérondif signale grâce à l'élément *en*, un décalage, aussi mince soit-il, entre deux situations nettement séparables. (Herslund 2000 : 93)

ジェロンディフはある状況と別の状況との同時性を表し、現在分詞はある状況が切れ目なく滑らかに別の状況へと続くことを表す。(…) このため、現在分詞が、ふたつの状況が互いに補完しあい、言わば融合することを表すのにたいして、ジェロンディフは *en* という要素のために、いかに小さなものだとしてもふたつの状況のあいだにずれがあり、そのふたつの状況ははっきりと区別できることを表すのである。

3.9. 武本 (2004)

(1) 武本は春木 (1991) と Kindt (1999) の研究を紹介したのち、次のような疑問点を提示する。

- ① ジェロンディフ節を主節に前置しにくい場合があるのはなぜか？ 後置型ジェロンディフ構文と前置型ジェロンディフ構文では、どのような意味的相違があるのか？
- ② ジェロンディフ構文で用いられにくい動詞があるのはなぜか？ とりわけ、ジェロンディフ節のアスペクト的制約は何に起因するのか？

N. B. この論文で武本は提起した問題点②についてはまったく触れずに終わっている。

(2) 武本は、ジェロンディフの〈*en*＋名詞句〉に共通するスキーマ的特性はセッティング (*setting*) であるとする。「場の設定」という意味だろう。ただし、このセッティングは Kindt (1999) の言うような「容器」ではなく、抽象化された、事象を取り巻く概念的な「場」であるという。

(22) a. *Il s'est blessé en tombant.*

彼は転んで怪我をした。

b. *En tombant, il s'est blessé.*

彼は転んだ時に、怪我をした。

(22 a) のようにジェロンディフが後置されているときは、ジェロンディフが表すセッティングは背景となり、前景的事象と背景的事象は融合され、文全体として単一の情報を表すとする。これにたいして、(22 b) のようにジェロンディフが前置されているときは、セッティング機能が鮮明になる。ジェロンディフが表す「場」は、そこに主要な事象が定位される。ジェロンディフが表す「時間」「条件」「原因」「手段」などのさまざまな意味は、前景化されたセッティングが表す限定であるとする。

(3) 武本は疑問点①の「ジェロンディフ節を主節に前置しにくい場合があるのはなぜか？」を、セッティングの前景化の可否によって説明しようとする。

(29) a. *Je suis passé par Dijon en allant à Besançon.* (Franckel 1989)

ブザンソンへ行く際ディジョンを通った。

(30) a. *En allant à Besançon, je suis passé par Dijon.* (Ibid.)

ブザンソンへ行く途中で、ディジョンを通った。

(31) a. *Je suis allé à Besançon en passant par Dijon.* (Ibid.)

ディジョンを通過してブザンソンへ行った。

(32) a. ?*En passant par Dijon, je suis allé à Besançon.* (Ibid.)

(32 a) の容認度が低いのは、概念化においてセッティングの枠組みが前景化しえないからだとして次のように述べている。

「要するに、後景的事象を取り巻くセッティングの枠組み設定がなされて、その中に前景的事象が定位される場合に、前置型ジェロンディフは成立するのである」(武本 2004: 139)

【考察】

武本の説明は十分とは言えない。(32 a) ではセッティングの枠組みが前景化しえないとしているが、なぜ前景化できないのかを述べていないからである。目的地は旅程に対して定位点となることができるが、旅程は目的地にたいして定位点となれないという Franckel の説明の方が納得できる。

武本の言うセッティングという概念を援用して説明を試みる。Franckel の例文を日本語にすると次のようになる。

a. 先月、ブザンソンに行く時に、ディジョンを通った。

b. ?先月、ディジョンを通った時に、ブザンソンに行った。

フランス語で容認度が低い例文は、日本語にしても容認度が低い。このことは、これはジェロンディフという文法形式に固有の問題ではなく、ふたつの出来事を並べてその間の時間的關係を示すときに、どちらがどちらの背景となるかという一般的な問題であることを示している。

次の例を見てみよう。

a. 先週、東京に行った時に、メトロで財布を落とした。

b. ??先週、メトロで財布を落とした時に、東京に行った。

b. の容認度の低さは次のように説明できる。「東京に行く」は、自宅から駅に行く、新幹線に乗る、東京駅で降りる、用事を済ませる、などの様々な局面を持つ複雑な事行である。また時間もそれなりにかかる。これにたいして「メトロで財布を落とす」は単純な事行であり、時間もかからない(落とすのは一瞬である)。大きく複雑な事行は、小さく単純な事行の背景(セッティング)になる。しかし小さく単純な事行は、大きく複雑な事行の背景(セッティング)になることはできない。

3.10. 渡邊 (2017)

渡邊 (2017) は現在分詞とジェロンディフを扱った最も包括的な研究である。第 1 章「ジェロンディフと現在分詞」がここでの考察に役立つ。第 2 章「主語不一致ジェロンディフ」は主節の主語とジェロンディフの意味上の主語が異なる例を、第 3 章「ジェロンディフの文法化と語用論化」では、ジェロンディフが文法化して慣用句となる過程を考察している。

(1) 渡邊は Kindt (1999) の「ジェロンディフ=容器説」を批判して、次の例では主節の時間幅の方がジェロンディフより大きく、説明できないとする。

(107) *En me couchant, j'étais presque décidé à prendre dès l'aube un train pour Lille.*

就床するとき、わたしは夜が明けるとすぐにリールにむかう列車に乗る決心がほとんどついていた。

渡邊はこの問題を回避するために、次の仮説を提案している。

「ここで、このような不都合を回避できる本書筆者の代案をひとつ提出したい。それは、**en Y** を、(108) の図 [図は省略] にみるように、そのたびごとに可変的な落ちつき場所として、**en Y**、**en Z**, ... というような範列をなしと考えると考えるというものである。そうすれば、かならずしも **Y** が **X** より大きい必要はなくなる」
(渡邊 2017 : 40)

そして次のような例を証拠として出している。

(109) **En allemand, en batave, en italien ou en égyptien, c'est toujours elle, éternellement actuelle ; notre Dalida nationale brille toujours au firmament des superstars.**

ドイツ語で歌っても、バタヴィア語で歌っても、イタリア語で歌っても、エジプトアラビア語で歌っても、いつでも彼女は変わらない。永遠に現在的なのだ。われらの国民的歌手ダリダは、いつもスーパースターの天空にかがやいている。

N.B. バタヴィア語という言葉はない。バタヴィアはインドネシアのジャカルタの旧名で、オランダによる植民地化の拠点となった場所である。**batave** とは、インドネシア化されたオランダ語のことか。

(110) **Une jolie fleur dans une peau de vache**

une jolie vache déguisée en fleur

牝牛の皮の下に、かわいい花がある

かわいい牝牛が、花に扮している

(111) **Il a agi en roi.** 彼は王のようにふるまった。

(112) **Il est mort en brave.** 彼は勇者として死んだ。

「歌手ダリダがどの言語で歌うかは、場合ごとに、あるいは曲ごとに変わってくることである。ここでは、それらの可変的な定位を、**en**+言語名で示している。(110) では、牝牛が花に扮するのは、ほんらいは牝牛であるものが、あくまでも扮装として花になっているという一時性がみられる」
(渡邊 2017 : 41)

【備考】

渡邊はこのような前置詞 **en** の性質を、本書 6.4.節でさらに考察して、Guillaume や Franckel の所説を引いている。要約すると、**Il est dans la prison.** では彼はたまたま刑務所の中にいる（たとえば清掃のため）だが、**Il est en prison.** では「服役中」であり、〈**en**+名詞〉は密接で本質的な関係を表すとしている。しかしその議論はあまり論旨が明確でないので、ここでは取り上げない。

(2) 渡邊は触れていないが、Leeman, Danielle « Sur la préposition 'en' », *Faits de langue* 9, 1997, Ophrys. にきわめて参考になる考察がある。

L'hypothèse que l'on peut avancer à partir de l'observation des paradigmes susceptibles d'apparaître dans le contexte être en ___ est que *en* ne s'accommode pas des noms désignant une propriété naturelle mais de ceux qui indiquent un état, c'est-à-dire la situation résultant d'une action, d'un processus extérieur à l'entité qualifiée. Par exemple, dans *Le vase a volé en éclats*, *éclats* désigne l'état du vase au terme d'une transformation qui l'affecte. De même,

dans *Voir les choses en grand*, les choses ne sont pas grandes intrinsèquement mais seulement dans la vision qu'en a le sujet : la grandeur n'est telle que par la construction qu'il opère de ces choses dans son imagination. (Leeman 1997 : 138)

〈être en ___〉という環境に現れることができる名詞の範列を観察すると、次のような仮説を提案することができる。**en** はその物が本来持っている性質を表す名詞とはいっしょに使うことができない。**en** といっしょに使える名詞は、その名詞が指す物に外から加えられた作用の結果、生じた状態である。たとえば「壺は粉々に砕けた」では、「粉々の破片」は壺に加えられた破壊の結果として生じた状態を指す。同じように、「物事を大げさに見る」では、物事はもともと大きいわけではなく、見る人の見方によってそうなるのである。大きさは、見る人が頭の中で行なう操作によってそうなっているにすぎない。

Leeman は次のような例を傍証として挙げている。

- ・ 服装 : être en robe ドレスを着ている (正装している)
- ・ 変装 : être en prêtre 僧侶の姿をしている
- ・ 状態 : être en miettes 粉々である
- ・ 研究分野 : être en Lettres 文学を勉強している
- ・ 乗り物 : être en voiture 自動車に乗っている
- ・ 地理的場所 : être en France フランスにいる

【解説】

Leeman が述べているのは、前置詞 **en** を付けられる名詞は、〈être en + 名詞〉という構文の主語が指す物がもともと持っている性質を表すものであってはならないということである。Leeman は次のような例を挙げている。

a. Max est en {manque / *carence }.

マックスは欠乏状態だ。

b. Max est en {colère / *peur }.

マックスは {怒っている / 怖がっている}。

c. La table est en bois.

そのテーブルは木製だ。

d. *Le tronc de l'arbre est en bois.

樹の幹は木でできている。

e. Max est en liberté.

マックスは自由の身だ。

f. Max est en froid avec Jean.

マックスはジャンと仲違いしている。

Leeman によれば、a. の *manque* は外的要因によって生じた欠乏状態だが、*carence* は本人の肉体的特徴による欠乏だという。このため **en** を取ることがない。b. の *colère* も何かによって引き起こされる感情だが、*peur* はその人が本来持っているものである (Max a peur des chiens.)。c. では、テーブルは木製だったり金属製だったりプラスチック製だったりするので、木製であることはテーブルの本質的特性ではない。しかし d. が示すように、樹木の幹はもともと木なので容認されない。e. の *en liberté* は収監・監

禁された人が自由になることを言う。ふつう「彼は寒がっている」という意味で **Il est en froid*. とは言えないが、「仲違いしている」という意味なら OK である。

Leeman, Danielle « Pourquoi peut-on dire *Max est en colère* mais non **Max est en peur* ? Hypothèse sur la construction *être en* », *Langue française* 105. も参照のこと。

(3) 渡邊は、次のような例をもとに、「なんらかの状態変化があることが、定位としてのジェロンディフの使用を容易にする」としている。

(114) **En ayant* beaucoup d'argent, on se crée beaucoup de faux amis. (Franckel 1989)

お金を多く持っている、多くのにせの友だちができる。

(115) *En gagnant* beaucoup d'argent, on se crée beaucoup de faux amis. (Ibid.)

お金を多くかせぐと、多くのにせの友だちができる。

(116) **En étant* désagréable avec tout le monde, il s'est isolé. (Ibid)

みんなに対して不愉快であることで、彼は孤立した。

(117) *En se rendant* désagréable avec tout le monde, il s'est isolé. (Ibid)

みんなに対して不愉快になることで、彼は孤立した。

【考察】

典型的な状態動詞である *avoir*, *être* をジェロンディフで用いにくいということはすでに指摘されている。

ジェロンディフが前置されて時の定位点を表す用法では *avoir*, *pouvoir* を用いることができない (ロベルジェ、Cl. & G. メランベルジェ 『現代フランス前置詞活用辞典』大修館、1983)。

a. *Beaucoup de femmes quittent leur emploi* { **en ayant* des enfants / *quand elles ont* des enfants }. 多くの女性は子供ができると勤めをやめる。

また春木は原因・理由を表すジェロンディフでは *être*, *avoir* を用いることができないとしている。

(29) **En étant* malade, il n'a pas pu assister à la réunion.

病気なので彼は会合に出られない。

(30) **En ayant* beaucoup de lettres à répondre, je ne peux pas lui écrire tout de suite.

返事を書かなくてはならない手紙がたくさんあるので、彼(女)にすぐに手紙を書けない。

(31) **En étant* enfant, elle ne comprend pas ces choses-là.

子供なので彼女はそういったことがわからない。

このことは、英語では状態動詞を〈be+現在分詞〉の進行形にすることができないということと平行的である。進行形を用いるには動きのある出来事ではなく、変化のない状態は不可となる。

a. **John is knowing* the answer. ジョンは答を知っている。

b. **This house is belonging* to Martin. この家はマーチンのものだ。

c. **I am owning* a car. 私は自動車を所有している。

フランス語でも古い時代には、現在分詞は英語と同じように進行形として用いられていた。また渡邊が主張するように、〈en+名詞〉が変化できる状態を表すとするなら

ば、これら二つの性質が競合することで、典型的な状態動詞である *être, avoir* を用いることができないと考えられる。

4. 現在分詞とジェロンディフのまとめ

ここまで先行研究を概観する過程で、さまざまな問題が浮上してきた。先行研究の諸説を参考にしてみよう。

(1) 統語的な結合関係

① 後置されたとき、分詞節・ジェロンディフの主節との統語的な結合関係の差が最も大きくなる。

a. *Il se rasait, chantant.*

彼は歌いながら髭を剃っていた。

b. *Il se rasait en chantant.*

彼は歌いながら髭を剃っていた。

分詞節が後置されたとき、主節と分詞節の間に必ず *virgule* が入る。この *virgule* は分詞節の統語的独立性の印である。伝統的には分詞節は主節の主語の同格関係とされるが、主節の主語にかかる二次述語 (*prédication seconde*) と考えられる。次のような例と平行的である。

c. *Elle priait les yeux fermés.*

彼女は目を閉じて祈っていた。

d. *Ils s'en sont allés bras dessus, bras dessous.*

彼ら腕と腕を組み合って立ち去った。

二次述語なので、主節の述語と並ぶ述語として働く。したがって a. は *Il se rasait et chantait*。「彼は髭を剃り、歌を歌っていた」と近い意味になる。分詞節がしばしば独立節に書き換えられると指摘されるのは、この統語的独立性による。

これにたいして b. のジェロンディフは、様態を表す状況補語であり、主節の動詞に従属し、統語的に密接に組み込まれている。したがって、後置位置で分詞節とジェロンディフが競合することはない。

② 前置されたとき、ジェロンディフは動詞に従属する状況補語ではなく、時・原因・条件などの意味を表す副詞節と同じ働きをする。したがって、後置の場合に較べて、主節にたいするジェロンディフの独立性は高くなる。

e. *En sortant, il a claqué la porte.*

立ち去る時、彼はドアをぱたんと閉めた。

分詞節が前置されたときは、後置の場合と同様に、主節の主語と同格関係の句であることに変わりはない。

f. *Levant les yeux vers lui, Caroline chuchota : Tu as vu, Georges ?*

彼の方に目を上げて、カロリーヌはささやいた。「ジョルジュ、あなた見た？」

このように前置された場合に、分詞節とジェロンディフは統語的にも意味的にもよく似ていて、競合関係にあるように見えるの。

(2) Gettrup や Herslund の主張するように、ジェロンディフは主節とは別の事行を表し、

分詞節は主節と一体となって一つの事行を表すと考えるのが妥当である。そのように考えると、両者の次のような性質を説明することができる。

① 時を表すジェロンディフでは、二つの事行に少なくとも部分的な同時性が必要である。同時性がないとジェロンディフは使うことができない。次の例では「市場を後にする」と「大通りに買い物に行く」は続けて起きた継起的な事行であり、同時性がないと考えられる。

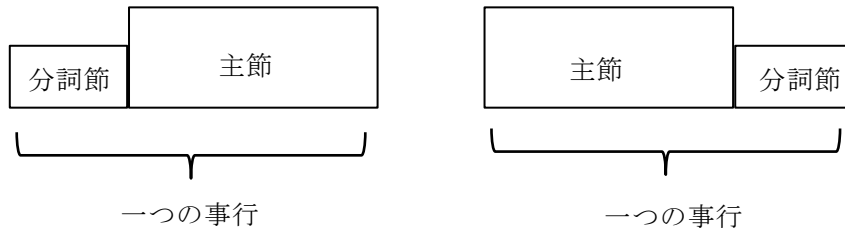
a. {*Quittant* / **En quittant*} la place du marché avec son paquet de toile sous le bras, il alla faire des achats dans des boutiques de la rue principale. (Gettrup 1977)

麻布の包みを小脇に抱えて市場のある広場を後にすると、彼は大通りの店に買い物をしに行った。

ジェロンディフに部分的でも同時性が必要である理由は、やはり前置詞 **en** の意味に求めるのが妥当だろう。*Il est en colère.*は「彼は怒りという状態の中にいる」ということを表しているので、〈en+状態〉の中に含まれていなくてはならない。

Kindt の「容器」説や武本の「セッティング」という考え方も、主節の事行とジェロンディフの事行とが重なっていないと成立しない。

これにたいして、分詞節は主節の表す事行の始まりの部分や終わりの部分を表し、図示すると次のようになることが多い。



たとえば次の b.では、「道路を横切る」は「畑に踏み入る」という主要な行為の前段階と見なすことができる。c.では戦車をその場に置き去りにする」は、「投降する」という行為の結果であり、その一部と見なすことができる。

b. *Traversant* la route, il prit dans les champs pour gagner la forêt.

道路を横切ると、彼は森へ行くために畑に踏み入った。

c. Le 12 mai, les Germano-Italiens se rendent au cap Bon, *laissant* aux Alliés un bon nombre de « Tigre ».

5月12日にドイツ軍とイタリア軍はボン岬で投降し、連合国にたくさんのタイガー戦車を残した。

分詞節には主節の事行を敷衍する用法や「結果」用法があるが、ジェロンディフにはないことをこのように説明することができる。

② ジェロンディフは主節の事行と部分的に同時性のある別の事行を表すと考えると、次のことが説明できる。

一つは時の定位点になれるかどうかである。Gettrup や Herslund が主張するように、ジェロンディフは主節にたいして時の定位点になれるが、分詞節はなれない。時の定位点になるためには、主節とは独立した別の事行を表していなくてはならない。

もう一つはジェロンディフだけに「手段」の意味があることである。

e. Il a arrêté un taxi *en faisant signe de la main*. [作例]

彼は手で合図してタクシーを停めた。

手段は主節の事行を実現するために取る行動なので、主節とは別の独立した事行でなくてはならない。たとえば *Elle a exprimé son refus en ne répondant pas*. 「彼女は返事をしないことで拒否する意思を表した」では、「返事をしない」ことが「拒否する意思」のサインとなっているので、両者は別々の行為である必要がある。

一方、分詞節は主節と一体となって一つの事行を表す。したがって、分詞節が主節と別の独立した行為を表すことはない。このために分詞節には「手段」の意味がないのだと考えられる。

(3) うまく説明できないのは、être, avoir, pouvoir などの状態動詞はジェロンディフで用いにくいことである。

a. **En étant très occupé, je ne suis pas venu*.

とても多忙だったので私は行かなかった。

分詞節では状態動詞も使うことができる。分詞節には使えない動詞という制約はない。

b. *Étant très occupé, je ne suis pas venu*.

とても多忙だったので私は行かなかった。

また主節が être, rester などの意味の希薄な状態動詞のときは、ジェロンディフを使えないというのも不思議である。

c. **Elle était à la maison en lisant*.

彼女は読書をして家にいた。

渡邊のように〈en+現在分詞〉が変化可能な状態の範列を必要とすると考えたとしても、c.のように主節が状態動詞のときに使えないことは説明できない。どうやらジェロンディフは、それが結合する主節も含めて「動き」(activité)を必要とするようである。昔は〈en+現在分詞〉が英語と同じように進行形の意味を持っていたことに起因するのかもしれない。

(4) 最後に残る問題は、ジェロンディフと分詞節には「同時性」「原因」「条件」「対立」などさまざまな意味があるが、それは〈～ant〉〈en+～ant〉という言語形式の多義性(polysémie)なのかという問題である。Kleiber (2008) は多義性ではないとする。

Le point important est qu'il ne s'agit pas de polysémie, mais d'interprétation construites contextuellement. Etant donné la relation syntaxique de subordination qui lie le gérondif à la prédication principale, il semble bien que la spécification de la valeur circonstancielle émerge de la combinaison de ces deux prédications et ne dépende donc pas d'un contexte plus large que celui de la phrase. (...) Il nous semble, à cet égard, intéressant d'attirer l'attention sur le fait que cette détermination de la valeur circonstancielle sous-spécifiée du gérondif dans le seul cadre de la phrase le comportant pose quand même des problèmes lorsqu'il s'agit de la valeur circonstancielle temporelle, celle où le gérondif fonctionne comme repère temporel.

(Kleiber 2008 : 109-110)

重要な点は、(ジェロンディフのさまざまな意味は) 多義ではなく、文脈的に作り上げられた解釈だということである。ジェロンディフを主節に結びつける従属という統語的關係を見ると、(ジェロンディフが) どんな種類の状況節と解釈されるかは、主節と従属節の結合關係から出て来るように思え、文を超えるより大きな文脈に影響を受けることはないと考えられるのである。(…) この点については次のことに注意しておくといいたいだろう。ジェロンディフの状況節としての意味価値は一義的に定まらず、その意味価値はジェロンディフを含む文の中で決定されると考えるとすると、ジェロンディフが時の定位点となる時の状況節に関して問題が生じることである。

【解説】

Kleiber は「同時性」「原因」「条件」などのジェロンディフのさまざまな意味は、多義ではなく文脈によって得られる解釈だとしている。ジェロンディフの中にはどの意味かを決めがたいものもあり、この考え方は納得できる。

a. *Ils progressèrent en se frayant un chemin à l'aide de leur coupe-gorge.* (Herslund 2003)

彼らは剃刀で道を切り開きながら / 切り開くことで前に進んだ。[様態 / 手段]

b. *Marion a pleuré en m'entendant crier.* (Halmøy 2003)

マリオンは私が叫ぶのを聞いた時 / 聞いたので泣き出した。[時 / 原因]

Kleiber は、ジェロンディフの意味価値は *sous-spécifié* (英 *underspecified*) だとしている。*sous-spécifié* とは、言語形式の意味や機能が十分細かく指定されておらず、おおまかな指定しかない状態をさす。「過小指定」「指定不足」と訳す。多くの場合、不足している指定は、文脈・状況などからパラメータを充填することで満たされる。

ジェロンディフの本義 [= 最も基本的・根源的な意味] は何か? それはおそらく *concomitance* 「随伴 (並存) 關係」だと考えられる。

c. *Il fait la cuisine en chantonnant.*

彼は鼻歌を歌いながら料理をしている。

この例では「料理をする」と「鼻歌を歌う」という二つの状況が並存していることが表されている。並存ということは同時に起きていることになり、「料理をしながら」と解釈することになる。

上の引用の後半で、ジェロンディフの意味が主節との關係だけで決まると考えると、ジェロンディフが時の定位点として働く場合に問題が生じると述べている。この後に 3.5. ジェロンディフは既知情報を表すか の (4) の引用が続いており、ジェロンディフが時の定位点として働くためには、主節に先立って定位されている必要があると述べているのだが、この問題についてはすでに見た。

(5) 以前、東郷が立命館大学の「応用言語学」で行った考察を見てみよう。

分詞構文は主節にたいして副詞的なはたらきをして、さまざまな意味を表す。

a. 理由

Being a sailor and an artist, he has little sense of money.

船乗りで芸術家なので、彼は金銭感覚に乏しい。

b. 時間

Having finished his work, John went to bed. 仕事を終えてジョンは床に就いた。

c. 条件

Cleared, the land will be valuable. 開墾されたらこの土地は価値が上がるだろう。

d. 手段

She learned a lot of things, watching them.

彼らを観察することで、彼女はたくさんのことを学んだ。

e. 付帯状況

He entered upon the new enterprise, his eyes wide-open.

彼は油断なく新規事業に取りかかった。

【考察】

分詞構文にいろいろな意味があるというのは正しくない。分詞構文が表しているのはただひとつ、ふたつの事態（出来事）の時間的・空間的並立である。分詞構文が表しているように見えるいろいろな意味は、事態（出来事）の並立から私たちが常識に照らして読み込んでいる推論 (inference) である。

(6) 分詞節と主節のどのような組み合わせが特定の意味を生むのかは、細かく検討する必要があるが、おおまかに次のように分けることができるように思われる。

a. [状態] + [状態] → 原因・理由

[be sick]+[stay in bed] : *Being sick, he is staying in bed.*

体の具合が悪いので、彼はベッドに寝ている。

b. [行為] + [行為] からはさまざまな意味が生じる。

i) 時

[walk home]+[meet a girl] : *Walking home, he met a girl.*

家に帰ろうと歩いていた時に、彼は少女に出会った。

ii) 手段

[raise his hand]+[stop the bus] : *Raising his hand, he stopped the bus.*

彼は手を挙げてバスを停めた。

iii) 様態・付帯状況

[chew his gum]+[speak loudly]

Chewing his gum quickly, he spoke loudly.

ガムをくちやくちや噛みながら、彼は大声で話した。

iv) 条件・仮定

[turn to the left]+[find the post office]

Turning to the left, you will find the post office on your right hand.

左に曲がれば右手に郵便局が見えるでしょう。

N. B. 主節は多く未来形・仮定法

c. [状態] + [行為] → 原因・理由

[be hungry]+[steal money] : *Being hungry, he stole money.*

お腹が減っていたので彼は金を盗んだ。

d. [行為] + [状態] からは次の意味が生じる。

i) 条件・仮定 [wear this dress] + [look like a princess] :

Wearing this dress, she will look like a princess.

このドレスを着たら、彼女は王女様のように見えるだろう。

N. B. 主節は多く未来形・仮定法

ii) 原因・理由

[lose his job] + [be out of work]

Having lost his job, he is out of work.

仕事を失ったので、彼は失業中だ。

(7) フランス語の分詞節とジェロンディフで試してみよう。

a. [状態] + [状態] → 原因・理由

Etant fonctionnaires, ils sont soumis à un certain nombre d'obligations.

公務員なので、彼らはいくつかの義務に従わねばならない。

(六鹿豊『これならわかるフランス語文法』NHK 出版、2016)

N.B. 状態はジェロンディフと相性が悪いので、分詞節のみ。

b. [行為] + [行為]

i) 時

J'ai rencontré un vieil ami en sortant du cinéma.

私は映画感から出るときに旧友にばったり会った。

N.B. 時の定位点となる用法は分詞節にはないので、ジェロンディフのみ。

ii) 手段

Elle gagne sa vie en enseignant le piano.

彼女はピアノを教えて生計を立てている。

N.B. 手段を表す用法は分詞節にはないので、ジェロンディフのみ。

iii) 様態・付帯状況

Elle est partie en courant.

彼女は走って立ち去った。

Il avoua, souriant.

彼は薄笑いを浮かべて白状した。

iv) 条件・仮定

Prenant davantage de précaution, il aurait pu éviter cet accident.

もっと用心していれば、彼はこの事故を防げただろうに。

En travaillant un peu plus, il réussira à l'examen.

もう少し勉強すれば、彼は試験に受かるだろう。

c. [状態] + [行為] → 原因・理由

Étant fort las, il s'est couché tout de suite.

とても疲れていたなので、彼はすぐに寝た。

N.B. 状態はジェロンディフと相性が悪いので、分詞節のみ。

d. [行為] + [状態]

i) 条件・仮定

En prenant plus de légumes et moins de matière grasse, tu seras toujours en bonne santé.

野菜をもっと食べて脂肪分を減らせば、ずっと健康でいられるでしょう。

Le mauvais temps persistant, la moisson serait moins abondante.

悪天候が続いたら、収穫量はもっと減ることでしょう。

ii) 原因・理由

Ayant trop bu la veille, il avait mal à tête.

前の日に飲み過ぎたので、彼は頭が痛かった。

En travaillant du matin au soir depuis quelques jours, il était épuisé.

数日前から朝から晩まで働いたため、彼は疲れ切っていた。